
蒼の魔剣士

こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の魔剣士

【Nコード】

N3892V

【作者名】

こう

【あらすじ】

——全てを背負うと、決めたのだから。

持ち主の意識を奪い、殺戮を繰り返す蒼い魔剣。ただ一人、魔剣の意志に打ち勝ったミカゼは、もう誰の手にも剣が渡ることがないよう、一人放浪の旅に出る。

二年後。世界には、人を襲う凶暴な魔獣と、それらを従える魔剣士がいた。

蒼い魔剣（1）（前書き）

某人気漫画とタイトルがとても似ていますが中身はぜんぜん別物です（たぶん）

蒼い魔剣（1）

夕焼けに染まる空の下、噴水のように血を吹き上げる少女の身体。呆然とするミカゼの目の前で、彼女は音を立てて公園の地面に倒れ込んだ。

赤茶色の煉瓦の石畳に、真っ赤な血だまりが広がっていく。少女はピクリとも動かない。苦しげに喘ぐことも、激痛に痙攣することもなく、ただ眠ったように横たわっている。

ついさっきまで言葉を交わしていた少女は、ただの一瞬で物言わぬ死体に成り果ててしまっていた。

ミカゼは顔を上げ、少女を背後から斬りつけた人物に目をやった。薄汚れた外套。すっぽりとかぶったフードのせいで、顔立ちすら判然としない。だが、女ではないということだけは体格から判断できた。

人を一人殺した後だというのに、男の身体からは不思議なほど力が抜けていた。今にも倒れ込んでもおかしくないような脱力具合だ。心ここにあらずといった風情で、ミカゼには目も向けず、何かぶつぶつと呟き続けている。

力なくぶら下げられたその右手には、少女の命を奪った凶器が握られていた。

鮮やかな蒼い光を刀身に纏った、古い拵えの長剣だった。

「……どうして」

半ば無意識に放ったミカゼの問い。

散漫に散っていた彼の意識が、今の一言が発せられた瞬間、ピタリとミカゼに向けられた。

その瞳に孕むは狂気のみ。感情は一切伝わってこない。殺してやるという殺意すら感じられなかった。

ただ、呼吸をするのと同じくらい自然な動作で振り上げられた蒼い刃は、紛れもなくミカゼの命を奪うためのものだ。

自分はここで死ぬのだろうか。他人事のように、ミカゼはそう思った。不思議と命は惜しくなかった。ここで殺されればまだ追いつける、向こうで少女と会えるかもしれない――そんなことさえ考えた。

だがその思考は、不意に鳴り響いた発砲音に遮られた。

ミカゼはビクリと反応し、音のした方を振り向いた。男もまた緩慢にそちらを向く。騒ぎを聞きつけたのだろう、町の駐在軍人が、拳銃を構えて男に狙いを定めていた。

「そこまでだ。剣を捨てて投降しろ」

そこでもうやく、周囲のざわめきがミカゼの耳に入ってきた。この公園にいたのは何もミカゼと少女だけではない。夕暮れの散歩コースとして、あるいは買い物帰りのちょっとした休憩などに利用している人間は他にもいた。そんな中で人が斬り殺されたのだ。まったく聞こえはしなかったが、悲鳴の一つも上がったりはしたのだろう。

軍人の言葉が届いているのかいないのか、男はミカゼから視線を外したまま突っ立っていた。振り上げた剣を降ろすでもなく、さりとて挑発的にミカゼを斬り殺すようなこともしない。まるで次の変化を待っているかのようだ。何かきっかけがあるまで、もう一度スITCHを入れられるまで、このまま何日でもこうしていそうな気配があった。

「聞こえないか！ 剣を捨てるんだ！」

軍人が声を荒げ、拳銃を構え直した。次の警告を無視したら撃つ――そんな気配が如実に伝わってきた。

――ああ、だめだ。

ミカゼはそんなことを思う。間近で男を見ているからこそ分かった。軍人の言葉を聞いた瞬間、彼の身体から猛烈な闘気が膨れ上がったのだ。

それはいわゆる、身の内から湧き出る戦意という意味での闘気ではなかった。臨戦態勢への移行。そこに、この男の感情は一切含ま

れていないように思えた。

否。そもそも、この男の様子には、感情の色がまるでなかった。

「……ッ！ 剣を捨てろと言っているんだ！」

軍人がそう怒鳴る。引き金が絞られる様子を、ミカゼははっきりと目に捉えていた。

そして、その引き金とまったく同じタイミングで、蒼く輝く剣を持った殺人鬼が覚醒していくこともまた、間近に肌で感じていた。だめだ。やめろ。撃ってはいけない。

脳裏に浮かんだそれらの言葉は、一つも声にならずに終わり、銃声が木霊し、それとほぼ同時に、ミカゼの前から男の姿が消失した。

どこにいるかは瞬時にわかった。ミカゼが目に向けた先、先ほどまで軍人が銃を構えていた場所で、男は剣を振り上げた状態で蹲っていた。

剣の間合いの遙か外まで一瞬で移動し、軍人の身体を正中線に沿って真っ二つに斬り裂いたのだ。左右に分かたれた軍人の身体は、それぞれが血をまき散らしながらくると回っていた。

血の飛沫を浴びながら、男はゆらりと立ち上がった。

その視線の先には、何が起きたのかまだ理解できていない、騒ぎを取り巻いていた人々の姿がある。

やがて、軍人の身体が男の両脇で地面に倒れた。ぐちゃっと鈍い音を立てたその肉の塊は、ほんの十秒前まで生きていた人間のものとはとても思えなかった。

男が剣を構え直す。

蒼い光が、凶悪な輝きを放つ。

そこでようやく、人々は彼の意思に――否、彼の意思などないことに気付いたようだった。

少女を殺したのも、軍人を殺したのも、別に恨みや理由があったからではない。

誰を殺すとか誰を殺さないとか、彼はそんなことをいちいち考え

てはいない。

ただひたすらに、機械のように、目に映った者を差別なく、分け隔てなく——平等に斬って捨てていくのだ。

「う、うわあああああああ！　逃げろ、逃げ——ぎゃあああ！！」

悲鳴が上がリ、悲鳴を上げた人間が真っ先に殺された。誰もが我先にと背を向けて逃げ出し、男はそれを一人残らず斬り伏せていった。蒼い光の剣閃は三、四人を一度にまとめて薙ぎ払い、その度に人間の四肢が玩具のように宙を舞った。

夕暮れの空の下、宵闇に染まりつつある町に、真っ赤な雨が降り注ぐ。

男は止まらない。泣き喚きながら逃げる者にも、意を決したように立ち向かう者にも、情け容赦なく剣を振るっていく。

広がりつつある阿鼻叫喚の中、その起点となった場所で、ミカゼは一人呆然としていた。

足元からかすかな水音が聞こえ、そこでようやく我に返った。見下ろすと、少女の身体から流れ出た血がミカゼの靴を汚していた。ミカゼは倒れ伏した少女に歩み寄り、全身が血塗れになるのも構わず、彼女の身体を抱きかかえる。生きる力を失ってしまったからだろうか。小柄な体軀からは到底想像できないような重さが腕にかかった。

どうして、と自問した。

男は現在進行形で人を斬り殺し続けている。少女はもう唯一の被害者ではなく、現時点でおそらく十人以上、この先もっと増えるはずの大勢の犠牲者のうちの一人となった。死ぬべき理由は一つもなかった。ただ運が悪かったという、それだけの話だ。

だからこそ、どうして、とミカゼは考える。

どうして自分は、生きているのか。

あの男が、たまたま視界に入ったからというだけの理由で少女に斬りかかったのなら、どうして自分がその役割を負わなかったのか。

彼女の両親——ミカゼの雇い主である商人夫婦の姿が脳裏に浮かんだ。良い人達だ。下働きでしかない自分を、家族のように扱ってくれている。だが、そのきっかけを作ってくれたのはこの少女だ。数えきれないくらい、色々なものを貰った。働く場所と仲間。暖かな居場所と家族。そして、生まれて初めての、友達という存在。たとえこの身を呈してでも、守らなければいけなかったのに。今ある全てを自分にくれた、かけがえのない、大切な人だったのに。

遠くから響いてくる連続した発砲音は、いっこうに鳴り止む気配がない。

あの男が駐在軍を相手に戦っている——ミカゼは最初そう思っていたが、次第に訝しく思い始めた。銃撃戦の音はかなり以前から聞こえてきている。あの男が剣士としてどれだけ強いとしても、しょせんは剣の間合いの中だけの力。雨あられのように降り注ぐ銃弾の中を、いつまでも生きていられるはずがない。

しかし現実には、発砲音は止まず、風に乗ってかすかに聞こえる怒号の響きは、若干の焦りを含んでいるようにすら感じられた。

ミカゼは顔を上げる。日は完全に沈み、血塗られた光景を街灯の明かりが照らしていた。肌に張り付く鉄錆のような血霞と、吐き気を催すような死肉の臭い。男が作り上げていった血道は、今なお続く惨劇への道標のようだ。

嫌な予感がした。

あの男は凶悪な殺人者として射殺、あるいは捕縛の後に処刑されるに違いない。当然のように考えていたその結末は、果たして本当に確かなものだろうか。

響き続ける争いの音。そこに如何なる理由があるにせよ、男がいまだに凶剣を振るい続けているというのは事実のようだ。被弾しながらも倒れることなく、狂人さながら暴れ狂っているというならい

い。そんな程度であればそのうち勝手に自滅する。

だがそうではなく、たった一人で、軍隊を相手に大立ち回りを演じているのだとしたら？

先に見せたあの目にも留まらぬ移動速度が、男にとっては基本動作に過ぎないとしたら？

「……ミカゼ！！」

不吉な考えが脳裏をよぎった瞬間、ミカゼの背後から、聞き覚えのある声がした。

「ミラ、さん……」

振り向いたミカゼのところに駆けつけてきたのは、ミカゼと同じ主人の下で働くミラという名の家政婦だった。

血相を変えて走り寄ってきた彼女は、ミカゼに抱きかかえられている少女の亡骸を目にして固まった。なんてこと、という眩きが聞こえた。沈痛そうに顔を歪め、ミカゼの傍らに膝をつく。

「可哀想に……どうしてこんな……」

手を伸ばし、少女の髪を指で優しく梳いてやる。彼女がそうしている光景を、ミカゼは以前にも見たことがあった。そのときの少女は、屈託なく、とても楽しそうに笑っていたように思う。少女の母親よりも更に歳上で、少女が生まれる前からあの家で奉公人として働いていたミラは、少女にとっては祖母のような存在だったのだろう。

「女の子が殺されたって聞いてね……。最初はまさかって思ったんだけど、聞いているうちに嫌な予感がしてきて……。どうしてこう、悪い予感ってのは当たるのかねえ」

半ば独白のような台詞を、ミカゼは黙って聞いていた。何を言う資格も自分にはないと思った。あの時、少女を助けることが出来たのは自分一人だけだった。もっと早く男の存在に気づいていれば、彼女の手を引いて逃げ出すことも、男の前に飛び出して盾になることも出来ただろう。だが実際には、自分は何もしなかった。最低限の警戒すら怠って、その結果、怪しげな男が少女の背後に立つこと

を見逃してしまった。

それで時間を巻き戻せるなら、ミカゼは今すぐ悪魔に魂を売らう。ミラに、あるいは少女の両親に、どうして守れなかったのかと、そう罵られても仕方ないと思った。

「それで、ミカゼ。あんたは大丈夫なのかい？」

心配そうなミラの声に、ミカゼは我に返った。

「……はい。僕は、別に」

凶剣が振るわれる前に、軍人による威嚇射撃が割り込んできた。そのためにミカゼは男の意識から外れることが出来た。思えば奇跡のような出来事である。男の目に留まった人間は、ほとんど例外なく殺されているというのに。

「そう……良かったね。あんただけでも無事で、本当に良かった」
そう言うミラの言葉に他意はなく、純粹にミカゼが生き延びていたことを喜んでいるようだった。

だが、少女の両親はそういうわけにはいかないだろう。下働きと愛娘とでは、どうしたって命に優先順位が生じる。こいつは生き残ったのに、どうして娘が——そう思うのは差別でも何でもない。子供を想う親として当たり前前感情だ。

顔を合わせるのとても辛い、逃げるわけにはいかなかった。意を決し、ミカゼはミラに主人の居場所を尋ねた。今の時間であればもう家に帰り、いつまでも帰らない娘と下働きに気をもんでいるといったところだろうか。

だが、

「……まだ戻ってない？ どうして？ いつもなら——」

「それがね、旦那様も奥様も、今日は東街区の方へお出かけでね。ちょうど今頃戻る予定だったんだけど」

東街区と聞いて、ミカゼは思わずそちらに目を向けた。

惨劇の痕が延々と続く先。今も戦いの音が鳴り響く場所。

「こんな状況だからね、きつとどこかに避難しているんだろう。……大丈夫だよ、あの人達がそう簡単に死ぬもんか。ともかく、私ら

も戻るよ。絶対に外に出るなって軍から警告が出てるし、この子もいつまでも泥まみれなんてあんまりじゃないか。身体を拭いて、綺麗にしてあげないと」

殊更に強い口調でそう言い、ミラは立ち上がった。ミカゼに少女の身体を背負うよう促す。ほら、男がいつまでも呆けてんじゃないよ。そんな言葉が投げかけられるが、ミカゼの耳にはまったく入ってこなかった。

ミラは、この事態がやがて収束するものと思っている。

戦闘はまだ続いているが、軍隊が出動しているのだ。件の凶悪犯はいずれ無力化されるだろうと、そう信じて疑いもしない。確かに、常識的に考えればその通りだ。さっきまではミカゼもそう思っていた。

だが、果たして本当にそうだろうか。

先ほども脳裏によぎった疑問。その直後にミラがやってきて、ミカゼが彼女と話している間もなお、戦闘音は続いていた。

男がこの公園を走り去ってから、もうかなりの時間が過ぎている。疑われないわけにはいかない。軍隊が今、たった一人のあの男にこずっているということ。

苦戦しているだけならまだいい。それどころか、逆に圧倒されているのだとしたら――

「ミラさん……少しだけ、彼女のことを頼みます」

「え？」

抱えていた少女をゆっくりと地面に下ろし、ミカゼは立ち上がった。背後から何事か呼びかけるミラの声が聞こえたが、あえて返事はしなかった。

幸か不幸か、行き先を考える必要はなかった。より多くの人間が殺されている方に向かえばいいのだ。

蒼い魔剣（2）

戦闘は断続的に続いている。

走っている途中、大勢の人とすれ違った。我を忘れて逃げまどうのではなく、何かの指針に従って皆が一樣に動いている。理由はすぐに分かった。軍が民間人を退避させているのだ。

どうやらこの先は、もはや市街地ではなく立派な戦場となっているらしい。避難していく人々の顔は可能な限り確認したが、その中に見覚えのある二人は見つからなかった。

杞憂なのかもしれない。二人はとくに戦場を脱出していて、今頃ミラと合流しているのかもしれない。だが、確かめずにはいられなかった。ミラの言う通り、悪い予感によく当たる。そして今ミカゼの脳裏には、最悪の想像図がこびりついて離れない。

怒号が徐々にはっきりと聞こえて来る。道端に転がる死体の中に、軍服姿が多く混じるようになる。空気に混じる血の成分が濃すぎて、喉の奥まで錆ついたような感覚に襲われた。綺麗な、新鮮な空気がほしいが、この先そんな場所はおそらくほとんどないだろう。

走っている途中、ふと思いついて、道端に落ちていた剣を拾い上げた。

場合によっては再びあの男と対峙するかもしれないと思ったのだ。そんな時に手ぶらというのは、あまりに心細い。

剣のベルトを無理やり腰に巻きつけ（留め具はなくなってしまっていた）再び走り出そうとしたところで、ミカゼは思わず足を止めた。

「……え？」

おそらく、路地に逃げ込もうとしたところをやられたのだろう。見覚えのある姿が、道路の脇に倒れていた。

一刀の下に斬り伏せられている他の死体と違い、その男の身体は見るも無残な有様だった。その死に際して一切の容赦も加えられな

かったことは明白だ。ただでさえ薄汚れていた外套は、銃弾の雨を浴びてボロ雑巾のようになっていた。黒いフードはどこかに落としたのか、素顔が露わになっていた。痩せぎすな中年男だ。何十人も人間を斬り殺した殺人鬼だとは、とても思えない。

あの男が――少女を斬り殺し、公園を瞬く間に地獄へと変貌させた男が、そこに倒れていた。

ミカゼはふらふらと歩み寄り、その首筋に手を当てた。脈はない。身体は冷たい。呼吸も心拍も当然ありはしないだろう。そもそも、足元に溜まった血の量を思えば、男がだいぶ前に絶命したことは明白だった。

――……じゃあ、アレは一体何だ？

ミカゼが向かっていった先で、今も銃撃の音は響き続けている。軍は一体、何と戦っているというのだ？

考えても仕方のないことではあった。あるいは男には仲間がいて、そいつ、ないしはそいつらがいまだに戦い続けているのかもしれない。

いずれにせよ、ミカゼの目的は戦闘ではないのだ。あの戦火の中から少女の両親を見つけ出すこと。彼らの安否を確認するまでは、余計なことに構ってなどいられない。

自らにそう言い聞かせて、ミカゼは男をそのまま捨て置き、再び走り出した。

あの蒼い剣が男の手元になかったことには、最後まで気づかなかった。

東街区に到着した後、ミカゼはほんの一瞬思考を巡らせた。

ミカゼの主人は夫婦で卸売業を営んでいる。主に扱うのは酒類だ。地元に醸成されるワインなどを、別の町に売り歩くことを生業としている。

主人の下で働いていたこの二年間、ミカゼは体の良い雑用として二人の商談に連れ回されることが多かったが、東街区には数えるほ

どしか来たことがない。

その数少ない東街区への用事の 하나가、酒に合うチーズを仕入れることだった。鼯鼠にしているのは小さいながらも有名な老舗で、ワインとセットで欲しがる人間が多いと聞いたことがある。

時期を考えれば、今のうちにその店を訪れて話をつけておくのが妥当だ。二人はその店に向かった可能性が高い。そう結論付け、ミカゼは再び走り出した。

風に乗って発砲音が伝わってくる。よくよく聞き分ければ、それらが鳴り響いてくる方角をある程度判別することが出来る。今はどこが戦場となっているのか、大体の方向と距離に当たりをつける。――思わず舌打ちした。目指す店があるのは、まさにその戦場の真ただ中だ。

音がより一層大きくなり、戦場はもう目と鼻の先にある。軍が一体何と戦っているのか、その正体は気になったが、それよりも優先すべきことがミカゼにはあった。おそらくこの近辺にいた人間は、逃がしやすいように一箇所にまとめられているだろう。少女の両親もそこにいる可能性が高い。手近な軍人に声をかけて、そこに連れて行ってもらえば――そう思ったとき、不意に、大勢の人間の悲鳴が聞こえた。

ミカゼは思わず顔を上げ、そして、その姿を目に映した。

かなり近い。走って十秒もかからないくらいの距離の建物。その屋根の上に、あの蒼い魔剣を手にした、少年のような顔立ちの兵士がいた。

遠目からでもはっきりと分かる、あの殺人機械のような目で、彼はある一点をじっと見つめ続けていた。

何をしているのか、と考えたのは一瞬だけだった。気付いた瞬間、ミカゼは駆け出していた。

魔剣を持つ兵士の方へではない。彼が見つめる先、悲鳴が上がった場所の方へだ。

一箇所に集まり、軍の主導による避難を待っていた人々。先の悲

鳴は彼らのものだろう。そして、あの兵士もまた、彼らに狙いを定めた。もう一刻の猶予もない。

ほとんど覚えのない東街区の風景だが、幸い、人々が集まっている場所には見当がついた。日陰広場だ。周りを建物に囲まれていて、ほとんど日の光が当たらないうら寂しい町のスポット。それでも位置的に便利ということで、ミカゼの主人もよくここを待ち合わせ場所に指定していた。

再び、悲鳴。

次いで怒号。幾重にも重なった発砲音。間に合わなかった。襲撃は既に始まってしまった。絶望に塗り潰されそうになる心を懸命に支えながら、ミカゼはそれでも走り続けた。死んだと決まったわけではない。諦めるのはまだ早い。

広場から逃げ出そうとする人垣をすり抜け、ようやくミカゼは広場へと踏み込んだ。

真ん中にぽっかりと空間が開き、その中心で兵士が蒼い剣を振るっていた。軍人達がまるで玩具のように次々と斬り飛ばされている。人が密集していて銃が使えず、やむなく接近戦を挑んでいるようだった。

そして、その少し離れたところに、足を引きずり逃げ遅れている女性の姿があった。最初の襲撃で傷を負ったのだろうか、死んではないものの、まともに立ち上がれなくなっているようだ。伴侶と思われる男性が、必死に彼女を担ごうとしている。

見覚えがあった。

その時、軍人達が取り囲む中から、蒼い剣を持つ兵士が物凄い勢いで飛び出してきた。

絶え間ない波状攻撃をついにやり過ぎ、包囲を突破した兵士は、ぐるりと周囲に視線を巡らした。それが不意にある一点――ミカゼの主人夫婦に向けて固定される。

その瞬間、ミカゼの頭は真っ白になった。

「おおおおおおおおおおおおおっ！！」

精一杯の声を張り上げ、兵士に向かって突っ込んでいく。とにかく奴の注意を自分に引きつけなければならぬ。それだけを考えていた。

突然の大声に、兵士がぐるりとこちらを向いた——と思った次の瞬間には、蒼い剣が横薙ぎの軌道でミカゼに迫っていた。

その初動の速さに、内心で驚愕した。振り向くまではゆったりとした動きだった。だが、そこから剣を振るうまでの動作がまったく見えなかった。動き出しから最高速までの時間差がほとんどない。彼に立ち向かった大勢の軍人が成す術もなく殺されていたのは、この攻撃に反応し切れなかったからなのだ。

だから、直前に気付くことが出来ただけ、ミカゼはまだしも勘の良い方だった。咄嗟に体勢を崩し、自分から倒れ込むことでどうにか攻撃を回避する。頭上すれすれを薙いでいく剣の感覚に背筋が凍る。

地面に手をついた直後、まだだ、という声が脳裏に響いた。

走っていた勢いは急には殺しきれない。ミカゼは覚悟を決めて、そのまま前方へ飛び出した。

果たして、その次の瞬間、ミカゼが倒れ込んだ場所にドカリと蒼い剣が突き立てられた。

飛び出した勢いを利用して距離を取り、立ち上がる。拾ってきていた剣を抜き、兵士に向かって構える。

ほとんど一撃必殺のように軍人達を屠ってきた攻撃を、ミカゼは二度凌いだ。だが、そのことに対して特に感想はないようだった。兵士は無表情のまま、ただ静かにミカゼに向き直った。

彼我の距離はおおよそ五歩分。普通に考えれば、剣士の間合いとしては少し遠い。だが、先の動作を鑑みれば、あの男にとっては十分に攻撃範囲内だろう。

主人夫婦の安否が気になり、兵士からわずかに視線を外す。二人は先ほどと同じ位置で、驚いたような顔でこちらを見ていた。ひとまずは無事なようだが、夫人の方は足に怪我をしている。あれでは

満足には逃げられまい。

「……おい」

時間を稼ぐ必要がある。そう思い、兵士に向かって話しかけてみた。

「お前は何者だ。さっきの男の仲間か？」

返事はない。聞こえているのかどうかも怪しい。ただ、兵士の目はミカゼから離れなかった。

殺人鬼の無機質な目線。あまり気分の良いものではない。

「答えろ！ お前は一体――」

そう怒鳴りかけた瞬間、唐突に兵士が動いた。

二人の間にあった五歩分の距離を一步でゼロにし、蒼い剣が稲妻のような速さで襲い来る。

だが、臨戦態勢で構えていたからだろうか、今度はその動きがころうじて見えた。反射的に身体が動き、紙一重で必殺の剣閃を逃れる。

そして、避けたミカゼの眼前には、空振りの勢いで身体が泳いだ兵士の姿があった。

「……くっ」

あまりに無防備過ぎて、かえって手を出すのを躊躇ってしまった。一瞬遅れて剣を振るうが、その時には兵士も体勢を整えていた。横に大きく跳んで距離を取り、再び睨み合いの構図に立ち戻る。

周囲から驚愕の声が上がる中、ミカゼは静かに、だが全力で脳を回転させていた。

今のは、とれた。

まるで勝ち目がないというわけではないのだと、ミカゼは自分に言い聞かせた。確かに速い。思っていたよりもずっと。だが、対応できないほどではない。

あの兵士、正確には蒼い剣を持つ人間は、どうやら自らの意志や目的で戦っているわけではないらしい。理屈は分からないがとにかくそういうものだと、とりあえずこの場は納得する。言葉の通りの

殺人機械だ。人を殺すために定められた動作を、愚直に忠実に再現する。だから攻撃はいつも最善手、最速で最短距離だ。

重く、速く、狙いも精緻精確。確かに途轍もない脅威ではあるが、だからこそ生じる弱点というのも存在する。

あらかじめ来る軌道が分かっているれば、兵士の速さを折り込んで先読みすることも不可能ではない。

五感が研ぎ澄まされる。二年前、より更に前。ミカゼがこの町で働き始めた十三歳の夏より以前。物心ついたときから剣を握り、必要とあらば人をも殺してきた日々の感覚が、徐々に身体に戻っていた。

少女と出会ったことで終わりを告げた日々。それから二年の間に、当時の勘は大きく鈍り、そのために少女に降りかかる凶刃を見過ごした。

最初から今の状態であれば、みすみす死なせはしなかったものを――そう思い、ミカゼは自嘲気味な笑みを浮かべた。兵士に向かって声をかける。

「どうした？　来いよ。お前はそれしか能がないんだろうが」

挑発が通じる相手とも思えなかったが、逃げまどう人々や集団で取り囲もうとする軍人達の中で、一対一の戦いを要求する相手というのはそれなりに新鮮だったらしい。一、二秒ほどの間の後、兵士は身を低くして突進してきた。

速い――が、それだけだ。予測の域を出ない。先ほどよりも数瞬速く身をかわず。身体が泳いだ兵士と、それを見下ろす自分。まったく同じ光景が再現され、そして今のミカゼに躊躇いはない。

剣を振り降ろそうと腕に力を込めた瞬間、ふと身体の横に風を感じた。

兵士が体勢を崩しながら、それでも放った追撃の一太刀だった。必殺の一撃を三回も避けられたことで、ミカゼに対しては工夫が必要だと殺人鬼なりに学んだのだろう。腕の力だけで振るわれた剣が、ミカゼの胴体に斬り込もうとする。

だが、しょせんそれは付け焼刃。

体勢を崩したまま放たれた攻撃など、視認してから対応しても十分間に合う程度のものでしかない。ミカゼは振り降ろす剣の軌道を変えて、兵士の攻撃と交差させた。

剣を持つ兵士の腕。その肩の付け根にミカゼの剣が食い込み――直後に斬り飛ばされ、高々と宙を舞った。

――勝った。

右腕を失った兵士が地面に倒れ込む。一応彼に剣を向けるが、こうなってはもはや抵抗の術はない。

後は彼を尋問して、目的は一体何なのかを問いただすくらいだが、それは軍の仕事だ。自分の役目は、これでひとまず終わった――そう思って気を抜いた瞬間だった。

「ミカゼ、逃げろ!!」

悲鳴のような主人の声が、ミカゼに向かって投げかけられた。驚いて振り向き、ミカゼはそこに、自分に向けて一直線に飛んでくる蒼い光の剣を見た。

「なっ――」

驚愕の言葉は最後まで続かなかった。蒼い剣は空中でくると回転し、ミカゼの右手にあった剣を弾き飛ばした。代わりのように手の中に収まる蒼い剣の柄。ミカゼは思わずそれを握りしめ――直後、頭蓋が割れるような凄まじい激痛に襲われた。

「ぐっ……あ、ああああああああああ!!」

天地が反転し、視界がちかちかと明滅する。猛毒のような力がたちまちのうちにミカゼの自意識を侵食してくる。

これは、一体何だ。

男が、兵士が残した最後の悪あがき――否、違う。これはこの剣そのものの力だ。剣を手にした人間の精神を破壊し、傀儡として支配下に置く。この剣にはそういった力が秘められているのだ。

支配された人間にはもはや自我など欠片もなく、剣が命じるままに、延々と人を斬り殺し続ける人形となる。ボロ外套の男も、若い

兵士も、こうやって剣に意識を乗っ取られてしまったのだろう。そして、宿主が死んだ瞬間に、新たな主を選んで支配する。だから戦いがいつまでも終わらない。

「こ、の……」

齒を食いしぼり、無理やりに息を吸い込んだ。

今この場で自分が支配されたら、今度こそ、主人夫婦の命はない。他でもない自分の手で彼らの命を奪う——それは、想像すら躊躇われる光景だ。

少女に、主人夫婦に、ミラに。この町で与えられた全ての恩を仇で返すような真似だけは、絶対にしてはならなかった。心を破壊しようとする剣の力に、ミカゼは全霊でもって抗った。

——相手が、悪かったな……。

暗くなりかけていた視界に、徐々に明かりが戻って来る。

脳の中を暴れていた激痛が、少しずつ遠のいていく。

「お前なんか……負けて、たまるか」

剣から流れ込んできていた力を、ミカゼは強引に抑え込んだ。優劣が逆転し、今度はミカゼが意思を示す番だった。殺戮はここで止める。もう誰にもこの剣を握らせはしない。自分が持っている限り、この剣の邪悪な力は発揮されない。

力の奔流が完全に途絶え、後には剣の淡い輝きが残るのみだった。周囲はしんと静まり返り、ミカゼの荒い息遣いだけが空気を揺らしていた。

ぼんやりとした街灯の明かりの下、全てが終わったことに人々が気付くのは、かなりの時間が経った後のことだった。

娘の亡骸を前にして、夫妻は長い時間黙りこんだままだった。

やがて主人は、ポツリと「仕方ない」と呟いた。

「何十人、何百人が殺された……家族を失った人も大勢いる。私もまた、その一人ということなのだろう……」

とても納得していない口調だった。そう言葉に出すことで、自分に言い聞かせているようだった。

「ミカゼには……改めて礼を言わなければいかな。お前がいなければ、あれから更に多くの犠牲が出ていただろう。私達の命もなかった」

やめてくれ、とミカゼは思った。一番守らなければいけない人を守れなかった。その失態を取り返そうと躍起になったというだけなのに、礼を言われる資格などあるはずがない。罵られる方がまだマシだった。

「……だが、ミカゼ、本気か？ その剣を持って旅に出るなど」

主人の問いかけに、ミカゼは頷いた。

「この剣が他人の手に渡れば、きつと、今日と同じことが繰り返されます……それなら、僕がずっと持っていればいい。火山の火口か、深い湖の底か……人の手の届かないところに封印します」

「それは、確かにそうすべきだ。だが、そんなことは軍の仕事だろう」

「軍がこれを適切に扱うという保証がありません。現に、最後にこれを持って暴れていたのは軍人だし、たまたまでも何でも一度誰かが手にしたらおしまいです」

「それは……だが、分かっているのか？ それを軍に渡さず、行方をくまますということは――」

「――この事件の黒幕。そう思われても仕方ないですね」

主人が濁した言葉の後を、ミカゼはあっさりと引き取った。

そうでなくても、ただ一人剣の力を抑え込んだミカゼに対して疑惑の眼差しを向ける者は当然出て来るだろう。なぜあいつだけが平気だったのか。そう考える人間は、たまたま、偶然、運良くななどという結論では絶対に納得しない。そこには何かしらの裏があると考え、一番妥当なのは、ミカゼこそがこの剣の真の持ち主だからというものだろう。

それでいい、とミカゼは思った。もともと功名心からの行動とい

うわけでもない。そう考えることで事の辻褄が合うのなら、いくらでも悪者にしてくれて構わない。

「そろそろ行きます。さっき言った通り、軍の人達には知らぬ存ぜぬで通してください」

主人は黙って頷いた。ミカゼは立ち上がり、部屋を出ようとして、ふと足を止めた。振り返る。

ここは少女の部屋だ。何度も招き入れられ、ミラと共にゲームの相手をさせられた覚えがある。生きていた頃の少女の名残が、一番強く表れている場所。

そんな中、ベッドの上には、今はもう動かない少女がいる。

町中の医者という医者が、緊急事態のために駆り出されていた。死体の相手をしている暇など誰にもなかった。彼女の傷を縫合したのはミラだ。擦り傷の治療くらいならともかく、外科手術の真似事など初めての経験だろうに、彼女は立派に作業を務めた。愛用の寝巻を着てベッドに横たわる少女の姿は、若干血の気が薄いことを除けば、生前の姿そのままだ。今にも起きだして、怖かったよーと笑みを浮かべる――そんな気さえした。

彼女の寝顔を見つめながら、ミカゼは最後にかける言葉を探した。さよなら、ではなく。

行ってくる、でもなく。

様々な言葉が頭をよぎり、結局、

「……ごめんね」

そう言っ、思いを断ち切るように前を向いた。背中に感じた三人の視線にはあえて答えず、ミカゼは部屋を出た。ぐずぐずしてはいられない。軍がやって来るまで、もうあまり時間はないだろう。

ベルトに剣を差し込む。鞘が見つからなかったもので、とりあえず分厚い布を何重にも巻いて代用品とした。最初の男と同じような真っ黒な外套を羽織る。ポケットの中には当面の路銀。どちらも主人が用意してくれたものだ。最初は断ったのだが、主人としての最後の手向けと言われては受け取るしかない。

深呼吸をひとつ。前を向き、ぐいぐいと足を進める。事件の中心地となった東街区と違い、ここ西街区の夜は比較的平穏だ。今のうちに裏口から出れば、誰にも見咎められずに町を出ることが出来るだろう。その後は――なるようになれ、だ。

不意に泣きたくなったが、泣くわけにはいかなかった。

全てを背負うと、決めたのだから。

大陸西部の町ボースを襲った、謎の殺人鬼による虐殺事件。

累計三百人以上を斬り殺した、史上稀なる凶悪犯罪。犯人と目された三人のうち、一人は死亡。一人は捕縛されたが、精神に異常をきたしており事情聴取は困難。そして最後の一人は、二年経った今も逃亡を続けている。

凄惨さと謎めいた展開を見せたその事件は、人々の間で広く語り継がれていった。とりわけ注目すべきは、犯人達が手にしていたのがたった一振りの剣だったということだ。蒼い輝きを放つというその剣と、犯人が見せたという鬼神の如き強さは、いつしか一つの異名となって人々の心に浸透していった。

すなわち、『蒼の魔剣士』と。

群狼（1）

物置小屋の片隅で、少女は膝を抱えて震えていた。

先ほどまでの狂騒はすっかり鳴りを潜め、不気味なほどの静けさがあたりを支配していた。

——なんで、どうして……。

頭が混乱して、思考がうまくまとまらない。

半年前から近隣の村々で噂になっていた、数十匹の狼の群れ。人間ばかりを狙って殺すという、血肉に飢えた獣の集団が、闇夜に紛れて村を襲いに來たのだ。少女が目覚めたとき、母と弟は既に殺され、父もまた、深い傷を負っていた。

助けが来るまで、絶対にここを出るんじゃない——父がそう言い残して外に出て行ってから、もうかなりの時間が経っている。その間、少女は言いつけを懸命に守り続けていた。物音を立てないよう身じろぎもせず、呼吸するのにも細心の注意を払った。

絶対に、ここにいることを狼達に悟られてはならない。それだけを自分に言い聞かせて、泣き叫んでしまいたいと暴れる心を、歯を食いしばって抑えつけていた。

だが、それもそろそろ限界に近かった。

周囲は静まり返っている。だがそれは、あくまで先ほどまでと比べての話だ。つまり、村人達の怒号や悲鳴が上がり続けていた時に比べれば静かになったという意味である。四足の動物が歩き回る音や、くちやくちやと、何かの肉を食むような音は、少女の耳にはつきりと届いていた。

奴らが小屋の周囲をぐるぐると回っているのにも、もう、ずいぶん前から気づいていた。

自分がいたら血の臭いを辿られる。一緒にいてほしいと懇願した少女に対して、父は感情を押し殺した声でそう言った。彼は少女を

この小屋に残し、分厚い扉に鍵をかけた。

お前だけは生き延びろ。最愛の情が込められた最後の言葉が、今にも折れそうな少女の心をかろうじて支えていた。けれど。

少女はじつとうずくまっている。懸命に耳を押さえて、周りの音を聞かないようにしている。だが、小屋を囲む狼の数が段々と増えてきていることも、自分が背中を預けている壁の向こうから、かりと爪を立てる音が聞こえてきていることも、はっきりと分かっていた。

助からない。

単純にして残酷なその結論は、まだ十歳にも満たない少女にとって、あまりにも重い事実だった。歯の根はガチガチと音を立て、喉の奥からは嗚咽が漏れ、頬にはいつしか涙が流れていた。

父親が鍵をかけていった小屋の扉が、不意に大きな音を立てた。

「……っ」

少女は思わず身を竦ませる。最初の音を皮切りに、連続して小屋の扉に何かがぶつかってきた。後ろの壁から聞こえてくる音が、ガリガリと強く大きいものとなる。天井の近く、格子付きの小窓から、怖気を覚える獣の息遣いが聞こえてくる。

もう、目を開けることすら叶わない。

「おと、さ……おか、さん……」

恐怖に震えた声が喉の奥から漏れ——その時、不意に周囲の音がピタリと止んだ。

「……？」

唐突な変化に、少女は恐る恐る顔を上げた。先ほどまで色濃く取り巻いていた獣の気配は、幻であったかのように完全に消え去ってしまっていた。

助かったのだろうか——そう思うが、安堵よりも疑問の方が大きかった。それらしい音は何一つ聞こえなかった。まったく音を立てずに、一体誰が、どうやって、あの凶悪な獣達を退けたというのか。

沈黙は、やがて静かな不安にとって代わった。先ほどのあからさまな恐怖ではないものの、真綿でじわじわ締められるような、息苦しい閉塞感があった。

少し外を覗いてみようか。少女がそう思ったのと同時に、扉の外側にかけられた鍵が、カシャンと音を立てて地面に落ちた。

「……っ！」

身を竦ませる少女が見つめる中、重たい扉が軋む音を立ててゆっくりと開かれる。仄かな明かりが差しこんできた。月の明かり、星の明かり――そのどちらでもない少女は思う。暖かなオレンジ色は、人の手が持つランプの灯かりだ。

「誰かいるのか？ 安心しろ、もう獣共は追い払った」

優しそうな響きの、若い男の声だった。待ち望んだ救い主の声に、これまで堪えていたものが一気にこみ上げてきた。少女は物陰から飛び出して、泣きじやくりながら彼に駆け寄った。

黒いコートの、背の高い青年だった。彼は少女を優しく撫でて、もう大丈夫だと静かに言った。

「他の人は？ ここにいるのは嬢ちゃんだけか？」

「……っ」

返事をしようとしたが声にならず、少女はただ、大きく頷いた。

「そうか……そりゃあ何よりだ」

不意に声のトーンが変わった。意味が分からず、男の表情を見上げる。

先ほどの優しげな眼差しは、なかった。男の表情に浮かんでいたのは、この上なく冷酷な笑みだった。

「出来ない仕事は嫌いだからな。潰せと言われた以上は……一人残らず、殺し尽くさないとなあ」

男の言葉と同時に、消え去っていた獣の気配が復活する。馬鹿な獲物をあざ笑うかのような、唸り声の大合唱。

「あ……」

少女は二、三步後ずさり、そのまま床にへたりこんだ。

目の前で起こったことが理解できなかった。この男こそが獣を操り、村を滅ぼした張本人である。そんな突拍子もなく、一切の希望が潰える事実を受け入れることなど、到底出来はしなかった。

「最後の一人なんだ、冥土の土産にいいもの見せてやるよ」

男はそう言って、腰に下げていた古い拵えの剣を抜き放った。

刀身が放つ光がランプの明かりを上塗りする。二年前に広くその存在が知れ渡った、輝く剣――通称、魔剣。

絶大な威力を孕むというその剣が振りかざされるのを、少女はただ呆然と見上げていた。

痛みも苦しみも恐怖もなかったというのは――ある意味では、幸せなことだった。

「……いーかげんにしなさいよ!!」

昼はレストラン、夜は酒場を経営している食事処で、アリアは目の前の男を盛大に怒鳴りつけた。

「そ、そう言われても、僕としてはより確かな……」

「時間がない誰でもいいこの際君でも構わないって言ってわたしを引っ張りだしたのは、アンタでしょーがっ!!」

アリアの剣幕に男はすっかり縮こまり、額に浮かんだ汗をしきりにハンカチで拭いている。

ふと我に返れば、周りの客が一体何事かという視線を向けてきていた。さすがにちょっと気になって、アリアは若干声をトーンを落とす――が、

「それを今になって、やっぱり別の人に頼むことにしたとか……ふざ! け! る! なあああ!!」

先の男の言葉を思い出して、やっぱり感情を爆発させてしまうのだった。

涙目になってしまっている男の背後には、屈強な三人の男がぽかんと立ち尽くしていた。

おそらくは、彼らがアリアの代わりに雇われた護衛なのだろう。

暴力沙汰に発展しそうなった場合のために連れて来られたらしい。アリアとの契約は目の前の男が始末をつけるべき問題なので、無関係である彼らは基本的には関与して来ない。が、十歳近く年下の少女に怒鳴り散らされて涙を浮かべている依頼主をさすがに哀れに思ったのか、「あーまあ、なんだ」と仲裁に入ってきた。

「怒るのも分かるけどよ、お嬢ちゃん。この兄さんの気持ちも考えてやれって」

「仕事の内容が『護衛』だからな。あんたみたいな子に怪我されちゃ、男としちゃ寝覚め悪いってもんなんだよ」

「違約金もちやんと払うって言うってんだしさ。な？　ここは穩便に――」

「うっさい黙れ」

宥めすかすような男達の言葉は、アリアの一言によってピタリと止まった。

「アンタ達もアンタ達よ。先に契約してる相手がいるって知ったなら、まずはそっちの解約を待つのが筋でしょうが。何をいけしやーしやーと人の仕事横取りしてるのよ。それに今変な言葉が聞こえたわ。わたしに怪我されたら男として寝覚めが悪い？」

それを言ったのは、三人組の左端の男である。名前を知らない（知ろうとも思わない）ので、頭部の特徴を鑑みて左から金髪、ハゲ、長髪と名付けることにする。アリアは金髪に挑発的な視線を向けながら、テールに立ってかけていた剣に手をかけた。

「そーいうアホなことをのたまうのは一体どこのおバカさんかしら。お姉さんの教育的指導が必要みたいね」

「……お姉さんて。お前、どう見たってガキじゃねえか。まだ十三かそこらだろ？」

「……っ！！　十六だあっ！！」

馬鹿にするような目でこちらを見やるハゲの一言に、ただでさえ沸点ぎりぎりだったアリアの怒りが頂点に達した。鞘ごと振るった

剣の先端はハゲの顎にジャストヒット。脳天を大きく揺さぶる一撃に、ハゲは二、三秒ふらふらと踊った後、バタリと仰向けに倒れ込んだ。

――抜かなかっただけありがたいと思え。

強気なアリアの心中とは裏腹に、店内は水を打ったように静まり返った。どこからか「やりやがった……」という呟きが聞こえ、その声に金髪と長髪が我に返った。

「こ、このガキ……ッ！」

怒りが籠もったその言葉に、アリアは負けじと怒鳴り返す。

「ガキっていうな！」

「ガキはガキだろうが！ 十六のくせに色気も起伏もねえナリしやがって！」

「わたしは遅咲きのよ！」

こめかみに青筋を浮かべた金髪から、ブチリと何かが切れる音が聞こえた。

「蕾のまま逝つとけやあ……！」

怒鳴りながら拳を振りかざす金髪。が、それよりも速くアリアは手を出していた。

先ほどのハゲと同じく顎狙い。失神一直線のコースを剣が走る。直後に盛大な音が響き、金髪がドサリと床に倒れた。

マジかよ、すげえという声が、周りの客から上がった。

「て、てめえ……」

一人残された長髪は、ここに至ってようやく事の重大さに気付いたらしい。焦燥を顔に浮かべながら、彼は懷からナイフを取り出した。

それを見て、さすがにアリアも少し頭を冷やす。

「ちよつと。こんな場所で刃物なんか見せちゃダメでしょ」

「う、うるせえ！ そう言うお前はさっきからエモノ使いっぱなしじゃねえか！ 卑怯だぞ！」

「抜いてはいないでしょうが！ 三対一だったんだからこれくらい

当然のハンデよ！」

とは言うものの、一対一になったのだからここからは素手で勝負、というわけにはいかない。まことに遺憾なことではあるが、金髪の言う通りアリアの成長は同年代の少女と比べて若干、とても微々たる差ではあるがほんの少しだけ遅れているので、真正面からの取っ組み合いで男に勝てるわけがないのだ。

長髪は長髪で、一度取り出してしまった凶器である。何かしらの大義名分が出来るまでは、引っ込めるのも格好がつかない。

膠着状態に二人が陥った――その数秒後、不意に、アリアの後頭部を何者かが小突いてきた。

「!？」

慌てて振り返る。まったく何の気配もなかったはずなのに、いつの間にか一人の男が真後ろに近づいてきていた。

左手には水の入ったコップとパン。右手には布に包まれた棒状のものを持っており、それでアリアの頭を叩いたらしい。

呆れ果てたような表情で、彼は言った。

「何を怒ってるのか知らないけど、ここでの喧嘩は迷惑だよ。他所でやってくれるかな？」

「あ、はい……」

淡々とした口ぶりに、アリアは思わず頷いてしまった。男は次いで長髪の方に目を向けて、

「あなたも。そんなもの出して、大人げないですよ」

「……あ、ああ」

むしろ救われたような表情で、長髪はナイフを懷に仕舞い込んだ。男は一つ頷いて、すたすたと空いているテーブルへと歩いていった。店内の視線を全て向けられているにも関わらず、彼はまるで気にしていない風に、夕食と思しきパンを口を運び始めた。

すっかり毒気を抜かれてしまったアリアは、ふと、同じようにぽかんとしている元依頼主と目が合った。

「……ッ！」

即座に元依頼主の顔中に広がる恐怖の色。が、こんな気が抜けた状態から改めて怒りを振りかざすのも馬鹿馬鹿しい。

「えっと……暴れてだいぶすっきりしたっていうか、どっちみちもう再契約なんか願い下げだし……その、もういい、です」

「それは、見逃してくれるってことですか……？」

恐る恐るといった風に、男はそう尋ねてきた。

「ええ、もう。どこへなりと誰とでもお好きなように。あ、でも今度やったら絶対に許さないから、その辺は覚悟しときなさいよ」

ハゲと金髪はその後十分程度で目を覚ました。何をされたのか長髪から説明され、バツが悪そうな表情でアリアに一瞥をくれたが、結局は何も言わず、彼らは元依頼主と共に立ち去っていった。

アリアはといえば、どんな理由があろうと騒ぎを起こされては困ると店主から説教を受け、解放されたのはそれから三十分後のことだった。店内に居残るわけにもいかなかったので、外に出て――そしてそのまま、店の壁に背を預けた。

数分後、喧嘩を止めたあの男が出て来た。彼はアリアの方を向いて、わずかに目を見開き、

「お礼参りは受け付けないよ？」

「……そんなじゃないってば。さっきのお礼を言いたかったのよ」
冷静に考えてみると、あの状況は完全に一線を超えてしまったというたとアリアは思う。

引っ込みがつかなくなっていたのはどちらも同じだった。そして、アリアは鞆に納めていたとはいえ、二人の獲物は共に刃物。一方が手を出したが最後、流血沙汰になるのは避けられなかっただろう。

「正直いつて助かったわ。止めてくれてありがと」

「……へえ」

「へえって、なによそれ」

「いや、てっきり『さっきはよくも邪魔してくれたな』って食ってかかられると思ったから」

「アンタわたしをどういう目で見てんのよ……」

気を取り直し、アリアは男に向き直る。歩き出した彼の横に並び、
「わたし、アリア。あなたは？」

「ルーク」

「ルークって呼んでいい？」

「いいよ」

「じゃ、ルーク。……ね、さっきのアレってどうやったの？」

アリアの問いに、ルークは怪訝そうに首を傾げた。

「さっきのアレって？」

「わたしの後ろ頭を小突いたとき。あんな状況だったし、これでも
けっこう警戒してたのよ？　いくら後ろからだからって、あんな簡
単に近づかれるなんて思ってもみなかった」

思い出すほど化かされた気分になる。金髪やハゲが目覚ますこ
とも考えていたし、周囲への警戒はむしろ強い方だった。そんな状
況で背後をとられるなど、普段なら絶対に許しはしない。

そうすると、このルークという男は何気に相当の実力を持つてい
るのではないかと、そう考えたのだ。お礼を言いたかったというの
が最大の理由ではあるが、これを確かめたかったというのかなり
あるのだった。

だが、ルークはアリアの心中など知らぬげにこう答えた。

「普通に近づいて普通に引っ叩いただけだよ。いくら警戒してたっ
て、背後の気配なんかそう気づけるものじゃないよ」

「……む」

普通の人はそうでもわたしは気づけるんだってば——と言い返し
たいところだったが、実際に彼の接近を許してしまったので黙るし
かない。

それでも納得いかないアリアに、今度はルークの方が問いかけて
きた。

「ところで、さっきの喧嘩は何が原因だったの？」

「……なんで？　気になるの？」

「それなりに。無理には聞かないけど」

アリアは少し迷ったが、やがて「いいわ」と頷いた。知られて困る話でもない。

「わたしと同じ席に座っていた人いたでしょ？　喧嘩には加わってなかった」

「ああ、騒ぎの間ひたすら小さくなって怯えてた人」

「そうそう。あの人、わたしが住んでる町にある銀行の人なんだけど」

思い出すに連れ、またふつふつと怒りが沸き起こってきた。アリアは努めて声を抑えながら先を続けた。

「三日前に、いきなりわたしが所属するギルドに駆けこんできたのよ。今すぐ護衛の人間がほしい。誰でもいいからって」

「それはまた。急な話もあったもんだね」

「まーね。理由がまた馬鹿みたいで、銀行の……と、これはさすがに言っちゃだめか」

本店へ送るべき現金の移送をすっかり忘れてしまっていた、というのが男が急いでいる理由だった。

その時はたまたま人が出払っており、非番のはずだったアリアがやむなく呼び出された。アリアの見てくれに男はあからさまに眉をひそめたが、今は猫の手でも借りたいと言ってほとんど強引に契約を迫ってきたのだった。

大量の現金を積んだ車は、今は村で一番頑丈だという倉庫に格納されている。そのことを知れば、当然、良からぬことを考える輩も出て来るだろう。ルークがそうだとはいわないが、酒場でちよつと知りあっただけの相手においそれと話すわけにはいかない。

だがそう考えると、この村でたまたま見つけたという男達に護衛を頼むのも、同じくらい危ない話と言えるような気がした。

「……ま、それもここまでのことだけだね。クビになった後のことまで面倒みきれないし。一応、道中の無事くらいは祈っておいてあげるけど」

「どうせなら一応じゃなくて、真剣に祈ってあげた方がいいと思うよ」

冗談めかした言葉への思わぬ反応に、エリアはルークの方を振り返った。

「どういうこと？」

「聞いてない？ 最近、このあたりに魔獣が出るっていう話」

ルークの言葉に少し考え、やがて一つの噂に思い当たった。

「それってあれ？ 狼の群れの話？」

「そう。一昨日も村が一つやられたらしい。で、襲撃された村を繋いでみると、どうもこの村の方に進んで来ているみたいだ」

ルークの言葉は、何を馬鹿など笑い飛ばすことが出来ないほどには、重いものだった。

村や町を標的とし、その住人を皆殺しにする。捕食や縄張り争いといった生態系上の行動をほとんどとらず、ただ殺戮だけを目的としているような常軌を逸した獣の集団。二年ほど前から姿を現した彼らのことを、この国では魔獣と呼ぶ。

最初は突然変異、もしくは未知の伝染病によるものかと考えられていたが、最近になって、彼らは通常の獣とはまったく違う形で生まれてくることが判明した。

だが、最も肝心な『なぜ人間ばかりを狙う獣が生まれるのか』という原因は、いまだ説明されていない。

ここ数ヶ月でいくつもの集落が襲われたという話は聞いていたが、この近くに出たというのは知らなかった。

「この近辺は今危ないよ。旅人なんて格好の餌食だろうし、襲われでもおかしくない」

肩を竦めて縁起でもないことを言うルークに、エリアは小さく笑った。

「まさか。それに、鉢合わせたとしても車には手出し出来ないでしょ。どっちかっていうと村にいるわたし達の方が危ないくらいよ」

「それもそうかもね。ちなみに、君はこの後どうするの？」

「ん。仕事なくなっちゃったし、帰りたいところだけど……ここって足が何もないのよね。歩いて帰るしかないかなあ」

ここに来るまで車を飛ばして約三日。徒歩での帰路はその何倍にもなろう。夜に必ず村や町に辿り着けるという保証もないし、野宿も覚悟しなければいけないかもしれない。

「あなたが車でも持ってるなら、乗せてって頼むところなんだけど」
「持ってるように見える？」

「……見えない」

車はただでさえ高級品である。ルークの貧乏そうな風体を見れば、分かりきっていた答えではあった。

「まあいいわ。旅行気分でのんびり戻るから。そういえばルーク、あなたはどこへ行くの？」

「僕は目的地があるわけじゃないんだ。ちょっと人を探していてね」
「そうなの？ 誰？ この辺に出てる搜索願いなら、わたしも一通り目は通してあるけど」

「いや、相手の顔は知らないんだ。ていうか、本当に居るかどうかもわからないし、むしろ出来れば居ない方がいいってくらいの相手」
意味不明なことを囁くルークに首を傾げるアリアだった。そんなことを話しながら歩いていると、やがて、行く先にこの村唯一の宿屋が見え始めた。

あそこには銀行員も泊まっている。ひょっとしたらさっきの三人組もいるかもしれない。そのことを考えると少しだけ気が滅入ったが、すぐに思い直した。ルークだってこの村の人間ではないのだから、あの宿に泊まるはずだ。彼と一緒にならば少しは心強い。

……と思ったら、宿屋の入り口でルークはあっさりと「それじゃあ」と手を振るのだった。

「え？ あなたここに泊まるんじゃないの？」

「宿代なんて贅沢なものは持ち合わせてないからね」

「ただだけ貧乏なのよ！ それじゃ一体どこで寝るの！？」

「橋の下」

あつさりと答えるルークに、アリアは開いた口が塞がらない。

「砂利の上に直に寝るのは痛いけど、今の季節、いい感じに草が生い茂っているからね。天然のベッドみたいで寝心地は悪くないよ」

「……ああ、そう……そ、それじゃあ、おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

頷いて、ルークはそのまま道を行く。この先にあるのは川だ。当然、橋もあるだろう。

——……冗談ってわけじゃないのよね。

世の中には、これといった目的地を持たず延々と世界を旅して回る人間がいる。一種の世捨て人である彼らは大半が変わり者で、金を稼がないので基本的にいつも貧乏だ。ルークもその手合いの一人なのだろう。確かに変人で金がない。

まあ、悪い奴ではなさそうだけれど。

そんな風に納得しながら、アリアは宿に入ってしまった。

幸い、銀行員も三人組も姿は見えなかった。

夜半過ぎ、アリアを起こしたのは、宿の外から聞こえるざわめきの音だった。

「……？」

寝ぼけ眼を擦りながらベッドから起き上がる。軽く身支度を整えて外に出ると、何やら人だかりが出来ていた。騒ぎの中心にいるのは、昨日までは村のどこにもいなかったはずの軍人と——何故か蒼白な表情で何事か喚いている銀行員だった。

——なにやってんだろ？

人だかりに混じって眺めていると、銀行員がアリアの方に目を向けて来た。彼は一瞬ギクリと身を固め、数秒の逡巡の後、何を思ったのかこちらに歩み寄って来て、

「き、君！ 頼み、頼みがある！ 君をまた雇いたい！」

「……はあ？ 何言ってるのよ、あなた」

「さっきのことは謝る！ 土下座でも何でもする！ だからお願いだ！ 一緒に来てくれ！」

「わっ！ ちょ、ちよっと！ 離してよ……っ！」

縋りつくように懇願してくる銀行員だった。訳がわからず、力づくで引き剥がそうとするが、やけに必死でなかなか離れようとしな
い。

そうこうしているうちに、軍人が見かねたようにやって来た。まあ落ち着いてと銀行員を抱え上げ、アリアに向かって、

「君は、昨日までこの人に雇われていたっていう？」

「え、ええ。何があったの？ こんなに取り乱すなんて、一体――」

「君の代わりにこの人が雇ったっていう三人組がね、車ごとお金を盗んで逃げたんだよ」

肩を竦めて、軍人はそう説明した。

「ついさっきのことだ。この人は昏倒させられて、車があった倉庫の隅に転がされていた。三人組の行方は今追っているところだ」

銀行員はガクガクと震え、うわ言のように「お金、お金を……」

と呟いている。心ここにあらずといったその様子は気の毒の一言で、ざまあみろ、という気にはさすがになれなかった。

「で？ 一緒に来てくれっていうのはどういうこと？」

「軍に任せてじっとしてなんかいられない！ 奪われたものは自分で取り戻さなければ！」

「……」

他でもない軍人の前でそれを言うか。わかってはいたものの、あまりの空気の読めなさに、アリアは嘆息をひとつ吐く。

「いい心意気ね。じゃ、わたしは寝るから頑張っ」

そう言って踵を返そうとするアリアに、銀行員は慌てて縋りついてきた。

「ちょ、待って！ 僕一人で追いかけても返り討ちに遭うだけじゃないか！」

「……ついさっき、誰が誰に何をしたのか、あんた自分で分かって

る？」

「う……そ、それについては、本当にすまないと思っている。さっき言ったようにどんな形の謝罪もする。例えば、君が望むなら今すぐ脱ぐ！」

「望むかそんなことっ！ まったく、仕方ないわね……」

先ほどの仕打ちがあったとはいえ、これほど狼狽している相手に知らん顔するのも気が引ける。

それに、アリアをクビにさせることもあの三人組の計略のうちなのだとしたら、アリアもまた、まんまと出し抜かれたという形になる。それは個人的に気分が悪い。

「わかったわよ。さっさと追いかけて、あいつらぶちのめしてやりましよ。行き先は分かっているの？」

「そ、それは……い、一応、タイヤの跡を辿れば追いかけるのは簡単だが……」

「途中で移動手段を変えたり、車が行き来する大きな道に合流されると、その先は分からなくなる……か」

その可能性は大いにある——銀行員の言葉の後を引き取りながら、アリアはそう思った。最初から金を奪うのが目的で彼に近づいたなら、逃走手段も当然あらかじめ用意しているだろう。

「おまけに夜中で視界も悪い。……まあでも、悩んでも仕方ないわね。とりあえず行けるところまで行ってみないと。ところで、追いかけるって言っても車はあるの？」

「軍の車を借りる！」

胸を張って宣言する銀行員だった。そんなこと出来るのかと思わず軍人の方を向くが、彼は何故か苦笑を浮かべて頷いた。

「さっき本店に連絡したら、軍の方に話を通しておくから即刻犯人を追いかけると言われた！ 捕まえなければ僕のクビが飛ぶ！」

ああ、そういうこと。

無茶なことをさせるとアリアは思う。が、その一方で、自分をクビにした人間がクビの恐怖に怯えているというのは、ちょっとだけ

痛快ではあった。

群狼（2）

軍が用意した車は、まるで廃棄場から引っ張ってきたようなオンボロだった。身軽なアリアが乗り込んだだけで、金属が軋むような音を立てる。走っている途中に空中分解するのではないかと思う。

露骨な嫌がらせに、アリアは小さくため息をついた。軍にしてみれば、お前達には任せておけないと言われたも同然なので、心情的に協力したがるのはよく分かる。しかし、いくらなんでもこれはあんまりではないか。

とはいえ、文句を言ったところで、新型の車を貸してもらえなくてもないだろう。

廃車寸前の車に文句を垂れていた銀行員を運転席に蹴りこんで、三人組の追跡を開始した。それがおよそ三十分前のこと。

それからずっと、アリアは隣席からの愚痴に耐え続けていた。

「そもそもあんな奴ら、最初から怪しいと思っていたんだ」

「へー」

「ちょっと気を許した瞬間に本性を表しやがって！」

「ふーん」

「僕に手を出したことを後悔させてやる……！ 泣いて謝るまで許さないぞ……っ！」

「それは大変ねー」

鼻息荒くまくし立てる銀行員に、アリアはもう生返事しかしていない。

最初はそれなりに相槌を打っていたのだが、延々と同じ話がループするので、真面目に相手をするのに疲れてしまったのだった。

平原の真っ只中を突っ切るように続く道の上には、三人組の車と思しき跡が今のところは続いている。このまま行けば中央都市だが、その前にどこかで横道に逸れるだろうとアリアは踏んでいた。

——隠れ家とか、別の車とか。まさか銀行の車のまま逃げ続けるな

なんてことはないだろうし……ん？

「ちょ、ちょっと止めて！」

車が進む先、丘のような起伏の上に見えた人影。車を避けるように道を少し外れて歩くその姿に、アリアは見覚えがあった。

「ルーク!？」

「……？」

振り向いた男は、しかし思い描いた人物とはまったく違う顔立ちをしていた。

「あ……ご、ごめんなさい」

背格好が似ていて、丈が長くぼろぼろなコートを着ているのも共通している。後ろ姿を見てもしやと思ったのだが、よくよく考えれば彼は今、橋の下で熟睡している頃だろう。

そそくさと先へ行こうとするアリアを、しかし男の方が呼びとめてきた。

「待った。ちょうどいいところに通りがかってくれた。聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「？ まあ、少しくらいなら」

銀行員に少し待ってくれるよう伝えて、改めて男に向き直る。

「なに？ 聞きたいことって」

「たとえば、あんたは今、強大な敵を前にして絶体絶命の危機に陥っていたとする」

「……はあ？」

道でも尋ねられるのかと思ったら、いきなり何を言い出すのだコイツは。そんな思いが声に出た。

「なにそれ。何の話？」

「まあ聞けよ。あんたはその敵に負けて、今にもとどめを刺されようかって状況だ。その時、その敵がこう言ってきた。命乞いをするチャンスをやろう、ってな。そんな時、あんただったら、何て言う？」

「……」

話しかけるんじゃないかと、アリアは内心で凄まじく後悔した。黙って先へ行ってしまうかと思ったが、それだと逃げるみたいで何か癪に障る。アリアは男の方を睨むようにして、こう言った。

「命乞いなんかしないからさっさと殺せ——わたしだったら、そう言うわ。……お待たせ、行きましょ」

話を聞いていた銀行員が、呆れたような表情で頷いた。アクセルを踏み込み、車が再び動き出す。

後ろに流れていく男の姿が消える瞬間、その口元からこんな言葉が飛び出した。

「いい返事だ……期待してるぜ、お嬢ちゃん」

捨て台詞にしては妙な内容にアリアは首を傾げ——その次の瞬間、車のボンネットに一匹の狼が飛び乗ってきた。

「う、うわ、ひいっ！」

「……っ!!」

——グルオオオオオオオオオオオ!!

突然の出来事に加え、目の前で放たれた咆哮に銀行員がハンドル操作を誤った。アリア達の乗った車は道路脇の岩に激突し、そのままだ動かなくなった。

強い衝撃を受けはしたものの、速度がそれほど出ていなかったおかげで傷はない。アリアは隣の銀行員の無事を確認し、這うようにして外に出る。

地面にへたりこむアリアの眼前に、先ほどの男が立ちはだかった。見上げる彼の瞳には、何か狂気に取りつかれたような色が浮かび、アリアの背筋がぞくりと粟立った。

「さっきこの道を通った三人組も、ずいぶん威勢のいい返事をしてくれた。……良かったのは返事だけだったけどな。実際に命の危機に瀕してみると、人間ってのは案外簡単にプライドを捨てるもんだ。あんたはどうか、お嬢ちゃん？ 自分の言葉を貫くか、三人組み

たいに泣き喚きながら助命を請うか」

男の言葉と同時に、周囲の物陰から次々と狼が姿を現した。

闇に溶けるような漆黒の体毛。アリアよりも二回りは大きい体軀。金色に光る眼。獰猛な殺気を孕んだ唸り声。間違いない。ルークとの会話に出て来た、近隣の村々を襲って回っているという狼の群れだ。

数十匹もの魔獣の集団に、アリア達は完全に囲まれてしまった。

「あ、あんた一体何なのよ!？」

「名前はヴァル。こいつらの飼い主みたいなんだ。あるお方の命令でね、ちよいと人間の数を減らしているところさ」

飄々とした男――ヴァルの言葉に、アリアは歯噛みする。

背後、車の中にいた銀行員が悲鳴を上げた。周りを見ると、狼がじわじわと包囲網を狭めてきていた。

「た、助け――」

外に出ようとする銀行員に、アリアは鋭く言葉を浴びせた。

「出ちゃだめ! 護身用の武器くらい車の中にあるでしょ! それ持ってじっとしてなさい!」

「あいつら近づいてくるじゃないか! き、君は護衛だろう! 何とかしろよ!」

「外に出てうろちよろされたら守れるものも守れないわよ! 何とかするからじっとしてろつつてんの!」

怒鳴り声に怒鳴り返すと、ヴァルが可笑しそうに笑った。

「ちっこい割にずいぶん威勢がいいな。嫌いじゃないぜ、そういう女。名前はなんていうんだ?」

「……うるさいっ!」

この包囲網を突破するには、頭であるヴァルを制圧するのが一番手っ取り早い。瞬時にそう判断し、アリアは振り向きざまに剣を抜き放った。手加減一切なしの速攻。だが――

「おっと」

実に軽いセリフと共に、ヴァルは右手の指で、アリアが全力で振るった剣をあっさりと掴んで止めた。

「……っ！」

どれだけ力を込めてもビクともしない。苦心するアリアに、ヴァルはニヤニヤと笑う。

「反則はいけないぜ。ラスボスの前に、まず雑魚を片付けなくちな」

「うるさいわね！ 狼の集団相手にするくらいなら、あんた一人倒す方がまだしも楽だったの！」

「……おいおい、ちよつと待てよ」

アリアの言葉にヴァルは笑みを消した。声のトーンが一気に下がる。

「あんな犬っころの集まりよりも下に見られてんのか、俺。そりゃあ心外だな」

「違うっていうなら……証明しなさいよ！」

アリアは強引に剣を引き、間髪入れずにヴァルの懐に踏み込んだ。身体を深く沈め、足払いをかけるように剣を振るう。

だが、アリアの剣は虚しく空を斬った。

剣を避けるために後ろへ下がったとか、そういう動作すら見えなかった。つい一瞬前までヴァルがいたはずの場所には、もはや誰の姿もない。

その代わりとばかりに、まったく気づかないうちに、アリアの剣が刀身の中ほどで折られていた。

——いつの間に……！？

愕然とするアリアの前の後ろから、笑いを孕んだ声が聞こえた。

「こんなもんか？」

アリアの首筋に、ひやりとした感触が添えられる。

「……っ」

動けば斬る。そんな気配が強く伝わってきた。声を出すことも躊躇われ、アリアはただ棒立ちになり、ヴァルからの言葉を待つ。

その時、ふと、ヴァルの武器が目の端に映った。そこにあつたもの——紅色の強い輝きを放つ刀身に、アリアは再度の驚愕に襲われた。

「……！ こ、これって……！」

「そう、魔剣だ」

アリアの言葉を引き取って、ヴァルは誇らしげにそう宣言した。

「一番有名なのは二年前の事件を起こした『蒼』だろうがな。この通り、それ以外の剣もないわけじゃねえのさ。それに、今は『あのお方』がいるんだ。これからはもっと使い手が増えるだろうよ」

——あのお方？

黒幕を仄めかすような彼の口ぶりは気になったが、今はそんなことを考えている場合ではなかった。

状況は最悪といっていい。完全に動きを封じられた状態で、それでもアリアは必死に頭を働かせる。

そんなアリアに対して、ヴァルが言葉を投げかけてきた。

「さて、さっきの問答が現実になったな。強大な敵を前にして、絶体絶命の大ピンチだ」

す、とアリアの横から剣が引かれた。

恐る恐る振り向くと、彼は剣を高く掲げて狼達を呼び寄せていた。包囲がより狭まり、もはや一足飛びで跳びかかれる距離にまで接近されている。銀行員の悲鳴が車の方から聞こえた。窓から中を覗きこむ狼に対して、短刀を無我夢中で振り回している。

合図一つで全てが終わる——そんな配置を終えてから、ヴァルは厳かに告げてきた。

「確かお嬢ちゃんは、『命乞いはしないからさっさと殺せ』って答えたっけな。……で、実際にこんな状況になったわけだが。今はどうだ？ 心変わりがあるなら聞いてやるぜ」

その言葉を受けて、アリアの頭には三つの選択肢が浮かんできた。一つ、先の宣言を実行する。二つ、あくまで徹底抗戦を貫く。最後、先の三人組と同じように、発言を撤回して助命を求める。

まず、一つ目は論外だった。自分が死ぬのは自業自得だとしても、銀行員まで巻き添えにするわけにはいかない。どんな手を使ってでも、せめて彼の命だけは守らなければならなかった。

そして、そう考えるなら、二つ目もあり得ない。戦っても勝てないというのはよくわかった。その上で更に戦いを挑むのは、自殺行為と変わらない。

かといって、三つ目——命乞いをしたところで、ヴァルがそれを受け入れてくれるだろうか？

そもそも、先の三人組に対して『返事だけは威勢良かった』などと失望したように語っているあたり、この問答は彼の遊びのような面が強いのではないか……？

「……さっき言った通り、わたしは命乞いはしない」

考えに考えた後、アリアはそう切り出した。

「ほう？」

「でも、そう宣言したのはわたし一人よ。車の中にいる人は、さっきは何も言わなかった」

彼がこの問答を遊びと捉えているなら、こうした言葉の駆け引きには、それなりに興味を示すはずだ。

腕で負けた以上、残る武器は口しかない。最悪、自分の身を差し出してでも、銀行員を守る——それが、アリアの出した結論だった。

「まさか一蓮托生だなんて言わないわよね？ あんたはわたしにか問いかけていなかったし、彼が回答を拒否したわけでもない。彼にはまだ、最初から命乞いする権利があるはずよ」

「ふむ。……咄嗟に考えたにしてはうまい言い訳だ。頭は回るし度胸はあるし、良い女だなお嬢ちゃん。ちっこいけど」

だが、とヴァルは首を振った。

「残念だが、助けてやるわけにはいかねえな。分かっているとは思いますが、どうせ何を言ったって同じなんだよ。潔く諦めようが、みつともなく泣き喚こうが、最後に死ぬことには変わりねえ」

「……なら、どうしてわざわざ命乞いの時間なんか——」

「遊びだよ、遊び。夜襲はほとんど狼共に任せっきりだからな。たまには俺自身が動き回るような遊びもしたくなるもんなんだ。つっても、大抵の奴は相手にもなりやしねえけどよ。そういった意味じゃ、お嬢ちゃんは割とよくやった方だ」

そんな褒められ方をされても、まったく嬉しくなかった。

「さて、それなりの楽しかったが、そろそろお開きといこうや」

ヴァルの言葉を理解しているかのように、狼達が獰猛な唸り声を上げ始めた。後はヴァルの合図だけだ。彼が剣を振り降ろした瞬間、自分と銀行員は、あの凶悪な牙の餌食となるのだろう。

「ま、安心しろや。死ぬときゃ案外一瞬だからよ」

「……っ」

せめて最後に一太刀でも浴びせようと、アリアは腰の鞘に手を伸ばす。それを知ってか知らずか、ヴァルは手を振り降ろそうとし――その直前、不意にあらぬ方向に目をやった。

「……うおっ!？」

叫び声をあげて、ヴァルは咄嗟に紅い魔剣で身を守った。

その直後、彼に斬りかかってきたのは――ヴァルの魔剣と対の輝きを放つ、蒼い魔剣だった。

強大な力を持つ魔剣同士の衝突は、その周囲に荒れ狂う暴風のような力の余波を振り撒いた。アリアは思わず身体を庇い、周囲からは狼達の、逃げ惑う子犬のような悲鳴が響いた。

「蒼い魔剣っ!？ とんでもねえ上客が来たもんだ!」

罅迫り合いを演じながら、ヴァルが狂喜に満ちた声をあげた。彼の闘志に呼応するように、赤い魔剣が輝きを強める。

「はああああああ!」

蒼い魔剣の持ち主――ルークは、鬨の声と共に剣を振り払った。

その直後、目にも留まらぬ速さで、追撃に打って出る。超高速の斬撃が、左右から連続してヴァルに襲いかかる。

身のこなしも、剣速も、アリアとは比較にもならない。

必殺としか思えない攻撃を、ヴァルは見事に対処した。蒼い剣閃

はその全てが、紅い魔剣に弾かれた。

戦いはそこで終わらなかった。二人の攻守が入り乱れ、紅と蒼の輝く軌跡が、闇夜の中で火花を散らし始めた。二撃、三撃、四撃――アリアに見えたのはそこまでだった。後はもう、何をやっているかも分からない。

時間にしてみればわずかな数秒であっただろう。撃ち合いは、アリアには永遠にも等しく感じられた。

最後に強く剣をぶつけ合った後、二人は同時に後ろに跳んで距離を取った。ルークはアリアの傍に着地し、そこでようやくこちらを向いた。

「心配になって来てみて良かったよ。大丈夫？ 怪我はない？」

「え？ あ……な、ない。大丈夫」

良かった、とルークは頷く。続く言葉を彼が口にしようとしたとき、不意にヴァルが割り込んできた。

「いいねえ！ 降って湧いた幸運ってのはこのことだ！ 蒼の魔剣士――確か名前は、ミカゼだったか？」

極上の相手が現れたことに興奮しているのか。ヴァルの口調は、これまでとは打って変わった、弾んだ調子になっていた。

「懐かしい名前だけど、あなたにそう呼ばれるのは不愉快だな」

「そうかい。ま、名前なんざどうだっていいさ。重要なのは、俺とあんたがこうして向き合っているってことだ！ 名のある剣士は何人が斬ってきたが、魔剣士を相手にするのは初めてだぜ！」

「……」

心底嬉しそうなヴァルとは裏腹に、ルーク――否、ミカゼの表情は冷めきっていた。

彼は嘆息をひとつ吐いた後、ヴァルを無視して、再度アリアの方に顔を向けた。

「車の中にいるのは銀行員さんか。じゃあ君もそこへ行って、じっとしてるんだ。すぐに終わらせる」

「で、でも――」

「いいから」

有無を言わせぬ口調に押されて、アリアはおずおずと移動を開始する。

会話を聞いていたヴァルは、ミカゼの発言に眉をひそめた。どうやら、『すぐに終わらせる』の部分が気に障ったらしい。

「言ってくれるじゃねえか。同じ魔剣士相手に、そんな余裕かましていいのか？」

「同じ……ね。あなたがそこまで強いとは思えないけど」
不敵なことを言いながら、ミカゼは剣を逆手に握った。

何をするのかと見守るアリアとヴァルの前で、蒼い魔剣がより強く輝きを放ち始めた。放電にも似た光が刀身を包み、周囲を青白い光に染め上げる。

「はあっ！」

強い掛け声と同時に、ミカゼは魔剣を勢いよく地面に突き立てた。
「——っ!？」

それはまさに、大地を走る雷光だった。

魔剣から放たれた力は地面に亀裂を作りながら、狼達へ一直線に向かっていった。直後に響く盛大な爆発音。地形すら変える強大な破壊力は、巻きこまれた狼達を地面ごと宙高く舞い上げた。

あれだけいた狼の群れが、一瞬で無力化してしまった。啞然とするアリア達の前で、ミカゼはゆっくりと、ヴァルに蒼い魔剣を向けた。

「同等と言うなら、これくらいはやってもらわないと」

「て、てめえ……!」

激昂したヴァルが、紅い魔剣を振りかざしてミカゼへと突進した。凄まじい速度で迫るヴァルを、ミカゼはあくまで平静に見据えていた。

アリアが見守る中、二人の魔剣士は再度の衝突を迎え——そして、互角に渡り合った一度目とは違い、二度目は呆気なく決着が訪れた。

「……!」

交差する形でミカゼの横を走り抜けたヴァルは、驚愕に顔を歪ませた。

何事かと思ったアリアの目に、宙を舞う紅い魔剣が目に入った。二人が交差した一瞬の間に、ミカゼが弾き飛ばしたのだ。

数秒の滞空時間の後、紅い魔剣が地面に突き立つ。だが、その時にはもう、ミカゼがヴァルの首筋に、ピタリと剣を突きつけていた。その光景は、折しも先ほどのアリアとヴァルと同じものだった。それを意趣返しと受け取ったのか。ヴァルは歪んだ笑みをミカゼに向けて、強気な言葉を投げつけた。

「命乞いの時間はいらねえ。さっさと殺せ」

「……と言われても、僕は別に、あなたを殺すつもりはない」

ミカゼの言葉に、ヴァルは声をあげて笑った。

「殺さない？ はっ！ あの悪名高い『蒼の魔剣士』がか？ そいつは一体何の冗談だ？」

揶揄するようなヴァルの言葉に、ミカゼはほんの一瞬沈黙した。

だが、直後には気を取り直したように言葉を続けた。

「聞きたいことがある。あの魔剣はどこで手に入れた？」

「……」

ミカゼの問いに、ヴァルは沈黙した。

笑みを消し、しばし何事か考えている様子だったが――不意にニヤリと笑みを浮かべ、逆にミカゼに対して問いかけた。

「やっぱあの話は本当か？ 蒼の魔剣士が『魔剣狩り』をやってるってのは」

その言葉に、ミカゼは肯定も否定もしなかった。

否定しないということが、この場合はそのまま答えだった。

「不細工なモンだなおい。魔剣士を狩りつくして、そのまま『あのお方』にも挑む気かよ」

「……そう、その『あのお方』。今までの魔剣士は、何故か全員そいつに忠誠を誓っていた。一体何者だ？」

ミカゼの反応に、ヴァルは実に可笑しそうな笑みを浮かべた。ク

ツクツと笑い、ミカゼの方を向いて、

「知るかよ。自分で探せ、馬鹿野郎」

そう言った直後だった。ヴァルは目にも留まらぬ速さで、懐からナイフを取り出した。

「……っ！」

即座に反応しかけたミカゼだったが、殺さないという言葉が、彼の動きを鈍らせた。

敵を斬ることを躊躇するミカゼを、ヴァルは心底馬鹿にしたように笑い、

——その直後、彼は自らの心臓に、ナイフを深々と突き立てた。

「——くそ！」

一瞬の後、ミカゼが慌てて彼に駆け寄った。だが、ヴァルは何の反応も示さない。身体からぐったりと力が抜け、ミカゼの腕に抱えられている。

「……駄目か」

やがてポツリと、ミカゼはそう言った。

ヴァルの身体を地面に横たえて、彼はこちらに歩み寄って来た。蒼の魔剣を鞘に納め、アリアに対してどこか寂しげな笑みを浮かべた。

「驚いた？」

「う……あ、まあ」

それはもちろん、驚かなかったといえは嘘になる。蒼の魔剣士といえば、国中に手配書が回っている殺人鬼だ。何百人もの人間をたった一人で斬り殺すとは、世の中には悪魔のような奴がいるものだと思ったことを覚えている。

だが、ここでアリアがそんな態度を見せてしまったら、彼はひどく傷ついてしまうような——そんな気がするのだった。

凶悪犯を相手に何を馬鹿な、とは自分でも少し思う。けれど、彼がこの場に現れなければ、自分も銀行員も命はなかった。それもまた、れっきとした事実なのだ。

そう。まずは何を置いても、そのことに対して礼を述べるべきだろう。

「あの、ありがとう、ルーク……じゃなくて、ミカゼ？」

「どっちでもいいよ。本名はミカゼだけど、この二年間はずっとルークで通してるし」

軍に追われている身となれば、偽名を使うくらいは当然のことだろう。ここは自分もそれに倣って『ルーク』と呼ぶべきなのかもしれない。

だが、

「……それなら、一人くらい本名で呼んであげないとね、ミカゼ」

「……ありがとう、アリアさん」

「アリアでいいわ。さん付けてどうも身体がかゆくなるの」

冗談めかした物言いに、ミカゼは笑った。そんな彼に対して、アリアは問うた。

「えーっと……なんていうか、聞いてもいいのかな？ その、色々」と

「話せることには限りがあるけど、それでいいなら。それと、一つだけ条件がある」

「なに？」

「他言は無用だってこと。他の人に話したりしたら、君の頭が疑われかねないからね」

アリアは最初、この言葉を冗談と受け取った。

冗談でも何でもないということに気づくのは、もうしばらく時間が経った後のことだった。

光る森（1）

町には軍隊がいた。

「……どうしてこうなる」

憐れみを誘うような声でそう漏らすのは、先日之夜に金を取り返して胸を撫で下ろしたばかりの銀行員である。

軍の搜索によると、現金輸送車は村からさほど離れていない、小さな森の中に隠されていたらしい。発見の報を受けた時の銀行員の喜びようは、それはもう狂わんばかりであった。

だが、旅はまだ終わっていない。車に積まれた山のような現金を本店に届けるのが、命よりも重い彼の使命である。というわけで、軍による事情聴取もそこそこに、彼は本店へ向かって再出発した。なぜか、アリアを伴って。

アリアとしては、現金輸送車を取り戻すのが最後の付き合いだと思っていたのだが、その後に一悶着あり、結局、目的地まで同行することになったのだった。

「一度は現金を奪われ……その上魔剣士に襲われたんだぞ……もう十分だろう。この上更に何かあるなんて冗談じゃない！ それなのに、どうしてこうなる!？」

「日頃の行いが悪いからじゃない？」

頭を抱えて独りごちる銀行員の後ろから、アリアは素っ気ない言葉を投稿かけた。

一応まだ雇用契約は有効であり、彼は今でもアリアの雇い主である。それを考えるとずいぶん不敬な物言いだだったが、アリアにはもう、彼に対して遠慮するつもりはまったくなかった。

「ぐぬ……き、君、もうちょっと考えて物を言ったらどうなんだ？」

「そっくり返すわその言葉。往来の真ん中でぶつぶつ言っちゃって、はつきり言うけど気味悪いわよ。あ、あんまり近寄らないでくれる

？ 知り合いだと思われたくないから」

「こ、この……ちょ、調子に乗るなよ？ 君なんか、今すぐクビにしてやっても構わないんだぞ！？」

「どーぞご自由に。せいせいするわよ、その方が」

「……なんだとお！？」

「……なんだってのよ？」

路上で火花を散らせる二人。その間に、とりなすような声が割り込んだ。

「まあまあ。二人とも落ち着いて」
ミカゼである。

先日の戦いで武器を失ったアリアの代わりに、実質的な旅の護衛を務めている、全国指名手配中の殺人鬼である。

「こんなところで喧嘩してたら目立つよ。どこかでお茶でも飲んで落ち着こう」

仲裁役の第三者のようなことを言っている割に、彼は彼で、そわそわと落ち着かない様子だった。さりげなさを装ってはいるが、視線は忙しく周囲に泳いでいる。

二年もの間、世間から逃げ隠れてきた人間としては、街中を堂々と闊歩する……とりわけ、すぐ隣を軍人が歩いているような状況というのは、なかなか刺激的だった。

アリアはそんな彼に苦笑し、安心させるように言葉を返した。

「そんなに周りを警戒したら逆に不自然よ。堂々としてなさいって。わたし達と一緒にいれば、疑われることはないんだから」

「そうですよ先生。ご安心ください、あなたの身分は我々が保証しますから」

アリアに続いて、銀行員もまたミカゼに向かって大きく頷いた。
アリアを相手にしているときは打って変わった、敬意の念に満ちた言葉であった。

「……」

「……その、先生はやめてくれませんか？」

沈黙するアリアに、苦笑しながら言葉を返すミカゼ。銀行員は彼の控えめな拒絶にも、「何を仰いますか先生!」と譲らない。

一体どういう心変わりかといえ、どうやら彼は、先の戦闘でミカゼの力に心酔したらしいのだった。心底惚れ込んでいるのだ。この町でのミカゼの滞在費は彼が自分の懐から出しているし、それどころか、仕事が終わった後も出来る限りの支援をしたいと言いつつ出している。

大げさに過ぎる彼の態度を、凄まじく頼もしい用心棒を繋ぎとめておくための演技かと疑ったアリアだったが、ここまでされるとさすがに認めざるをえない。……と同時に、わたしのときは必要経費も出し渋ったくせに、という思いも湧いてくるのだった。

そもそも、銀行員は最初、ミカゼを用心棒として雇うからアリアなんか必要ない、というような態度をとっていた。それをミカゼが、対外的な身分のあるアリアも一緒にいてくれた方がありがたいと言いつつ出したので、渋々同行を認めたのである。アリアが銀行員に対して薄情となっている理由がこれであった。お前なんかいらないう相手に、どうして好意的な態度がとれようか。

とはいえ、不機嫌な理由の全部が銀行員絡みかといえば、決してそういうわけではないのだった。

銀行員のように切羽詰まった事情があるわけではないが、それでも目的もなしに同じ場所に留まり続けるというのは、存外ストレスが溜まるものだ。

周りを歩く軍人を眺めながら、アリアは嘆息を一つ吐いた。

「……でも、本当に参ったわね。これで足止め三日目かあ」

その異変が初めて確認されたのは、一年以上前のことだった。

国領の北にある小さな農村。その付近にある森に、ある日突然、人の身体ほどもある、巨大な繭が発生した。

淡い燐光を放つそれを村の人々是不気味に思い、農具などで除去しようとしたが、これが岩のように硬くビクともしない。

そうこうしているうちに月日が経ち、満月の夜、繭の中から無数の生物――人の血肉を糧とする、凶暴な魔獣が産まれ出た。魔獣は付近にあった村を襲い、住人達を虐殺した。

魔獣の襲撃にも関わらず、何人かの生き残りがいたのは、魔剣士という統率者がいなかったためか。

生き延びた人々は、自分達の村に起きた悲劇を――とりわけ、魔獣の卵とも言えるべき繭について語った。魔獣による被害が広まり始めていた当時、彼らがもたらした情報は、たちまちのうちに国中に広まった。

現在、件の白い繭は、その規模に関わらず軍隊による対応を絶対とする、国策レベルの重要案件となっている。繭が駆除されるまでは周辺の地域に戒厳令がかかり、基本的にすべての街道は通行禁止となる。

アリア達がいるのもまた、そんな事件に巻き込まれた町の一つだった。

滞在したその日の夜に繭が発見されたという、嫌がらせのようなタイミングであった。

車を借りるくらいならともかく、国を挙げての作戦実行中において、銀行員ごときの事情が特例として認められるはずもない。輸送車は事が終わるまで軍が責任を持って預かるということになったらしい。それは逆にいえば、事が終わるまでは何があっても街道を行うことは出来ないということだった。

二日前、銀行員はありったけの蛮勇を奮い起こし、本店に遅刻の連絡を入れた。

結果として、どうにか了承は得られたようだった。

だが、その後半日、水すら喉を通らなかった彼の惨状を鑑みれば、よほど絞られたのであろうことは想像に難くなかった。この時ばかりはアリアも同情し、ベッドの上でうなされる彼に、ほぼ丸一日付き添っていたのだった。

そして、三日目の終わりである今日。

遅刻の了承は得られたものの、一分一秒でも早く来いと厳命されたのだろう。銀行員は先ほどこから、何度もミカゼに頭を下げていた。「先生！　どうかここは一つ、そのお力で彼奴らを――」

「だから駄目です。軍に喧嘩を売る気はないし、それに、仕事の邪魔しちゃ悪いでしょう」

レストランで食後のお茶を飲みながら、ミカゼは銀行員の願いを却下した。

くそう……そう呟きながら俯く銀行員をよそに、アリアはミカゼに声をかける。

「でも、実際あなたが協力した方が早いんじゃないの？　あの繭って……その、ヴァルが言ってた『あのお方』の仕業の可能性が高いんじゃない？」

この町に来るまでの車の中で、アリアは彼から魔獣の正体と、魔剣士の存在に関して話を聞いていた。

この二年、全国を旅して回る中で、ミカゼはあの狼の群れのような魔獣の集団と十回以上遭遇し、その都度、ヴァルのような魔剣士とも剣を交えたという。

剣の輝きの色も、持ち主の性格も様々だったが、ただひとつ、『あのお方』に対して忠誠めいた感情を持っていたという点が、全員に共通していたらしい。

そして、『あのお方』の忠実な下僕である魔剣士達は、常に魔獣を従えていた。

ミカゼが倒しただけでも、その総数は五十を超える。それだけの数の獣が、都合よく魔剣士の配下として用意されていたなどというのは、いくらなんでも考えにくい。

異様な誕生方法は、決定的な証拠といえた。魔獣とは、そもそも生物ですらなく――

「魔獣は『あのお方』によって生み出された、生物兵器なんじゃないか――って、そう考えてるんじゃない？」

「そう考えれば説明出来るかなってだけで、証拠は何もないし……何より発想が突飛過ぎて、誰にも信じてもらえないよ」

ミカゼは笑い、そしてこう続けた。

「せめて『あのお方』に直接会ってみないことにはね。今回は魔剣士もいないみたいだし、軍に任せておけば問題ないと思うよ。魔獣は人間ばかりを狙うというだけで、基本的にはただの獣だから」

「……そんなこと言って。本当は軍と関わるのが嫌なんですよ?」

それもある、とミカゼは素直に頷いた。

こうして見る分には、彼はその辺にいる青年と何ら変わらない。

『殺人鬼』などという物騒な単語は、その外見からは到底想像できない。

魔剣士や魔獣に関しては一通り話を聞いたが、ミカゼ自身のこと——とりわけ、二年前に何があったのかという話に関しては、アリアは何も聞いていなかった。その辺の話題を、ミカゼは露骨に避けていた。

だからこそ、気になる。

確かに彼は強い。剣士として単純に腕が立つし、魔剣の力を解放すれば、それこそ、この町を沈めるのなんて朝飯前だろう。

だが、彼はアリアと銀行員を守って戦ってくれた。そんなことをする義理も義務もないのに、心配だったからと、夜道を駆けて助けに来てくれたのだ。

自分の味方が正義の味方だとはいわないが、少なくとも、狂気かられて大虐殺をやらかすような人間とはとても思えない。

本当にあの事件の犯人なのか。そう問い質したい気持ちは強い。

だが、アリアにわかるほど露骨に二年前の話を避けたのは、聞かないでほしいという明確なメッセージだろう。

虐殺事件そのものは事実である。そして彼がその関係者だというなら、犯人でなくても、つらい過去を背負っている可能性は十分にある。

どう考えても、好奇心で聞いていい話ではない。そう思う。

「……」

「……ん？ どうしたの？」

気付けば、ミカゼはなぜか入口の方に目を向けていた。つられてそちらを向くと、三人の軍人が、店員に席の案内を頼んでいるところだった。

アリアや銀行員と一緒にいる今、ミカゼに不審者の目が向けられることはない。が、二年の間に染み付いた習性は数日でなくなるようなものではなく、気になるものは気になるらしかった。

「さて、悪いけど、僕は先に行くね」

唐突にそう言っ、ミカゼは席を立った。

「へ？ どこへ？」

「言い忘れてたけど、僕、この町には前に一度来たことがあるんだ。思い出のある場所を幾つか巡ってこようと思って」

「……はあ？ なにそれ。そういうことはもっと早く言いなさいよ」アリアも銀行員もこの町は初めてだったため、宿屋や、車を停めておく施設を探すのに、初日はだいぶ手間取ったのである。

ミカゼがこの町のことを知っているなら、その辺のことも色々聞くことが出来ただろうに。そう思うアリアに、彼は申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「だいぶ昔のことだから、つい忘れてたんだ。ごめんね」

片手をひらひらと振って、ミカゼはレストランを出ていく。

ついて行こうかと、一瞬だけ考えた。とても気になる彼の過去。思い出の場所というのがどういうものなのか、出来れば知りたい。

だが、知られたくないから、彼は一人でそこへ行こうとしているのだろう。

結局、浮かせかけた腰を再び下ろし、アリアはお茶を一口啜った。ミカゼを挟んで対面に座っていた銀行員は、いまだに俯いて何かぶつぶつ呟いていた。

実のところ、この町に来たことがあるというのは真っ赤な嘘である。

レストランを出て人気のない通りに入ったところで、ミカゼは背後を振り返った。

「……何か用があるんでしょう。コソコソしてないで、出て来たらどうですか？」

夕方あたりから自分達の後をつけてきていた気配に向けて、ミカゼは声をかけた。

返事はない。だが、逃げ出すような様子もない。動こうとしない相手に向けて、もう一度呼びかける。

「来ないならこっちから行きますよ」

「……待ってくれ、分かった。出て行くよ」

そんな言葉が聞こえ、物陰から一人の青年が姿を現した。

撫でつけた金髪に柔和な表情。どこか高貴な雰囲気纏っているが、身につけている服は見紛うことなき軍服である。

腰に下げている剣は、軍人に支給されているものとは拵えの作りが違う。どうやら個人の所有物のようだ。

だが、彼はそれを抜くことはなく、降参とばかりに両手を挙げた。
「なかなか勘が鋭いんだな。だが、誤解はしないでほしい。私は君と争う気はない」

「へえ。周りに手下を潜ませているのに、ですか？」

そう指摘すると、彼は驚いたように目を見開き、次に困ったような苦笑を浮かべた。

「本当に鋭いな……。彼らは諜報部員、忍び隠れるのが本業の人間達なのだが……」

そう言いながら、青年は右手を二度振った。その瞬間、囲んでいた複数の人間の気配が一斉に退いていった。

撤退の合図。私兵を完全に退かせた後、青年は改めてミカゼに向き直った。

「これで、少しは信用してもらえらるだろうか？」

「……少しだけなら。でもこれはこれで、あなたの目的がわからない。何のために僕の後をつけたんですか？」

「それはもちろん、君を放っておくわけにはいかなかったからだ。理由は言うまでもないだろう」

思わせぶりの言葉。ミカゼが返答できずにいると、彼は自ら続きを口にした。

「蒼の魔剣士、ミカゼ。間違いないな？」

「……ええ」

「素直でよろしい。私はリチャード。階級は大佐。国軍諜報部の長を任されている」

あっさりと自分の肩書を口にした青年――リチャード。驚いたミカゼだったが、すぐに思い直した。

正体を明かすということは、あるいはここで『蒼の魔剣士』の件を終わらせるつもりなのかもしれない。先ほど周りを囲んでいた彼の部下と思しき連中も、暗殺目的の待ち伏せと考えれば納得がいく。先ほど部下を退かせて見せたのも、ミカゼを油断させるパフォーマンスかもしれない。

周囲の気配を探りながら、ミカゼは慎重に問うた。

「あなたの目的は僕の逮捕ですか？ それとも……手っ取り早く殺そうと？」

「どちらでもない」

予想に反した言葉を、リチャードはあっさり口にした。

意図が分からず戸惑うミカゼに、彼は笑いかけてきた。

「君にいなくなられては困る。少なくとも、今はまだね」

「……どういことですか？」

「レストランで連れの少女と話をしていただろう。すまないが、あの程度の内容は私も聞かせてもらった」

あまりすまないとは思っていなさそうな口調だった。リチャードは先を続ける。

「なかなか興味深いことを言っていたね。人間に魔剣を与え、魔獣

を産み出す『あのお方』……私には心当たりがある」

「……っ！？ それは、一体どういう――」

思わぬ一言に詰め寄ろうとした時だった。路地の方から足音が聞こえ、次いで酔っ払いが騒ぐような物音が響いてきた。

リチャードは一瞬そちらに目を向けた後、次いでミカゼの方を向き、

「こんな場所で話す内容ではないな。明日にでも私のところへ来るといい。検問はこれを見せれば通れる。リチャードに呼ばれたと言え、誰かが案内してくれるだろう」

通行証明らしき手帳をミカゼに渡し、リチャードはくるりと背を向けた。

「また明日」と手を振るその後ろ姿は、まるで気さくな友人に別れを告げるかのような態度だった。

光る森（2）

岩か鋼かと思うような強度を持つ白い繭だが、一応、傷をつけることは不可能ではない。

要所要所に傷をつけ、脆くなったところを剣や斧で破壊していく。そうした作業を、軍人達は朝から延々と続けていた。

運悪く夜勤となったエイナル二等兵は、同僚と共に斧を振り降ろしながら、深い嘆息を吐き出した。

「壊しても壊しても……ったく、森に火でも放った方が早いんじゃないのかあ？」

「まったくだぜ。無駄にデカイし硬いし広いしよお」

「こらそこ、無駄口叩くなあ！」

檄を飛ばしてくる上官の声にもどこか張りが無いのは、彼も内心ではうんざりしているということの表れか。うえーい、とやる気のない返答をしながら、エイナルは鬱憤を晴らすようにひと際強く斧を振り降ろした。

魔獣の卵らしきこの繭は、どういうわけか広大な森にしか出現しない。ならば森ごと焼き払ってしまえば手っ取り早いというのは、おそらく多くの人間が考えることだろう。

だが、近くに町や村がある以上、そんな軽拳に軍が出るわけにもいかない。面倒だろうが手間だろうが、一つ一つ潰していくしかないのだった。

「大砲でもあればなあ、一気に吹っ飛ばせるのによ」

「愚痴ってないでやろうぜ。あとちょっとで休憩時間だ……ん？」

エイナルを諷めた同僚が、ふと何かに気付いたように顔を上げた。「どうした？」

「いや、今そこで何か動いたような……」

おいおいよせよと思いつながら、エイナルもまたそちらを向いた。繭の駆除をしているのは何も自分達だけではない。動員された二

十人の兵士が二人一組となって作業に当たっている。大方そのうちの誰かだろうと思ったのだが、

「……っ！　ちょ、お、あ、あんた何やってんだ!？」

同僚が目を剥いて叫び、エイナルもまた言葉を失った。

木々の奥、深い暗闇の中から出て来たのは、まさしく幽鬼のような一人の少女だった。

長い黒髪に黒のワンピース。闇に溶けるような装いと、闇に浮くような白い肌。

その人間離れした美貌に、状況も忘れてエイナルは見惚れてしまった。

「あんた……ていうか、君は町の人？　どうやってこんなところまで来たんだ？」

同僚が問い質すが、少女は答えず、ただ彼やエイナルが手にしている斧に目を向けた。

同僚の声を聞き取った周りの兵士達が、一体何事かとこちらを注目し始めた。少女は彼らにも目を向け、フンと小さく鼻を鳴らした。

「おい、何とか言えよ。口がきけないのか？」

完全に無視されたのが気に入らなかったのか、同僚がわずかに苛立ったような声でそう言った。少女の肩を掴もうと手を伸ばす。

その瞬間、少女は初めて彼の方に目を向けて、冷徹な声を発した。

「触らないで」

「……は？」

少女が何を言い出したのか、その時何が起こったのか、同僚のみならずエイナルもまた理解できなかった。

ただいつの間にか、彼女に伸ばしかけていた同僚の腕の肘から先が、ごっそりと消えてしまっていた。

「あ……は、あああああああああああああ!？」　な、

何だこれ、なん——」

「お静かに」

冷酷なひと言と共に、少女はさっと手を振った。

その瞬間、彼女の周囲の空間が揺らぎ——今度は同僚の上半身が消えてしまった。

崩れ落ちる下半身に目をやりながら、少女は満足げに呟いた。

「騒々しいのは嫌いなもの」

——え？ 何、手品？

呆然とするエイナル。その背後から、いち早く我に返ったらしい誰かが叫んだ。

「な……何してる！ う、撃て！ 撃ち殺せ！」

言うが早いか、銃声が立て続けに響いた。エイナルもまた遅れて銃を構える。

数にして二十近い銃口に狙いを定められ、止まない弾の雨に晒されながら、それでも少女は平然としていた。

その瞳には危機感も恐怖も焦りもなく——ただ、虫けらを見るようなつまらなそうな色ばかりが浮かんでいた。

「まったく……大人しく逃げていれば、見逃してあげたのに」

彼女のそんな呟きは、一番近くにいたエイナルだけがkarouじで聞き取れた。

言葉と同時に、彼女の背後の空間がゆらりと揺れた。少なくともエイナルの目には最初そんな風に映った。

だが、そうではなかった。彼女の身体の周囲で、何か得体の知れないモノが煙のように立ち上り、揺らぎ始めているのだった。

あれは何だ——エイナルがそう思った瞬間、少女の周りに揺らめいていたモノは弾かれたように大きく広がった。

エイナルを飲み込み、後ろにいた仲間達を飲み込み、少女が放った何らかのモノは、それでも飽き足らずにまだ広がっていく。背後から聞こえたどよめきから察するに、周囲にいた夜勤班全員を飲み込んだようだった。

「……こ、こりゃあ」

動揺から覚めた後、エイナルが見たのは、まるで星空の中に浮かんでいるような風景だった。

携行していたランプの明かりは一切途絶え、代わりの光源となっているのは、靄の中に散りばめられた砂粒のような光である。漆黒の中に浮かび上がるそれらの輝きは、まさしく夜空に浮かぶ星々のようだった。

あまりの光景に誰もが息を飲み、我を忘れ――そしてエイナルはその中で、静かに告げる少女の声を聞いた。

「さよなら」

辺り一帯、全て焦土と化していた。

その中心で少女は嘆息した。目障りな連中を一気に葬ったのは良かったが、一緒に繭まで消し去ってしまったからだ。

産み付けること自体はそれほど大した手間ではないが、繭は周囲に木々がなくては育たない。森だった部分を跡形もなく吹っ飛ばしてしまった以上、ここで魔獣を育てるのはもう不可能だった。

だが、一応威力は最低限に留めておいたので、森全体が消えてなくなったわけではない。残った繭だけでも事は足りるだろうと、少女は結論付けた。

その時、

「派手にやったな」

背後からの声に、少女は笑みを浮かべて振り返った。

「兄さん」

現れたのは、闇を具現化したような少女とは対照的な、光輝を纏ったような異常な存在感を放つ男だった。

見事に何もなくなっている周囲を睥睨しながら、彼は少女に問いかけた。

「久しぶりだな、クロエ。この惨状は一体どうした？」

問いを受け、少女――クロエはバツが悪そうに眉をひそめた。

「繭の様子を見に来たら、軍人達に見つかってしまって。騒ぎにな

りそうだったから、まとめて片付けたのだけれど……」

「一緒に繭も消し去ってしまったか……ふむ」

腕を組み、思案する男。芳しくないその表情を受けて、クロエは申し訳なさそうに目を伏せた。

「短絡的だったかしら。うまく力を加減すれば、繭は無事に残せたかも……ごめんなさい、兄さん」

「いや、いいさ。繭などいくらでも作り直せる。それより、怪我はなかったか？」

少女――クロエの頬に手を添えながら、男は優しさの籠もった口調で言う。

クロエもまた、先ほど兵士に触れられようとした時の態度とはまるで違う、優しい笑みを浮かべていた。

「ありがとう。大丈夫よ。あんな連中に傷つけられるほど、私は弱くないわ」

「まあ、そうだな。しかしそれでも、心配するのが兄の務めだ」

クロエの髪を慈しむように撫でながら、男は思案げな声で言う。

「しかし、少し事が大きくなってしまったな。ここはもう諦めた方が良くかもしれん」

「そんな……繭はまだ残っているし、これほど広い森なら、何度でも使い回せるのよ？ それをみすみす手放すなんて……」

「俺も惜しいさ。だが、何しろ死人が出ってしまったからな。魔獣の繭だけならいざ知らず、こうなっては軍も本気で調査に乗り出してくるぞ」

騒動が大きくなることを、男は懸念していた。そんな彼に、クロエは強く進言した。

「軍なんて相手にもならないわ。いくら調査に来たって、仮に戦いに来たとしたって、私達が負けるはずが――」

勢い込んでそう言うクロエだったが、しかし、兄が突き付けてきた人差し指に言葉を飲み込んだ。

「それは駄目だ、クロエ。言っただろう。俺達が自ら動くのは厳禁

だ」

静かな、しかし厳かな口調。思わず黙したクロエに、男は続けた。「確かに、ただ滅ぼすだけなら、俺達が自ら暴れた方がずっと早い。魔獣なんぞをちまちま産むよりずっとな。だが、そうやって人間を滅ぼしたところで、得るものなどひとつもないだろう」

「……ええ」

クロエは大人しく頷いた。確かに、壊れた世界を王様気取りで支配したところで、虚しいだけだ。

自分達が目指しているのは、独裁者などではないのだから。

「どうせなるなら、救世主に。そうだったわね、兄さん」

「その通り。魔獣と魔剣士の存在が、ようやく世間に広まってきた。絶対的な恐怖になるまでには、もう少しかかるだろうが……気長に待たせ。これまでずっと耐えてきたんだ。もうあと数年、我慢のうちにでも入らない」

兄の言葉に、クロエは頷いた。

わざわざ魔獣を産み出しているのも、魔剣を作り出して人間に与えているのも、全てはそのための布石だった。

人であらざる自分達が、救世主として世間に受け入れられるための下地。それが、魔獣と魔剣士だった。手の出しようがない、天災に等しい脅威となった魔獣と魔剣士を、自らの手で討ち滅ぼすのだ。何も知らない世間の人々は、心から感謝し、二人を喝采することだろう。

「……わかったわ。この森は諦める。それでいいのよね」

「ああ。すまん。せっかく手間をかけて、ここまで繭を育てたというのに」

「ううん。もともと、悪いのは私だもの。……でも、ときどき思うわ。どうして私たちがこんなことをしなければならなの、って」

愚痴めいたクロエの言葉に、男は苦笑した。

「まったく。こんな力さえなければ、俺たちも普通に暮らすことが出来ただろうに」

「父さんと母さん、どうしているかしらね。私達を捨てたこと、少しは後悔しているかしら？」

「別の意味ではしているだろうな。中途半端な情けなどかけず、きちんと息の根を止めるべきだったと。今頃は、報復を恐れて震えているんじゃないか？」

「……あり得るといえるのが切ないわ。自分達の子供を、何だと思っているのかしら」

「悪魔の生まれ変わりだろう。何度もそう言われたではないか」
「確かに」

この世でたった二人の兄妹は、そんなことを言い合いながら笑い合った。

「……でも、本当にもったいないわね。ここの魔獣はもう少しで孵るのに。育てるのも楽じゃないのに」

「そう言うな。変に欲張って、取り返しつかない失敗をしてからでは遅い」

「そもそも、こういう時のためにヴァルがいたのにね。せっかく魔剣をあげたのに、何をやってたのかしら、まったく」

「そう責めてやるな。確証はないが、相手が悪かった可能性が高い」
兄の言葉に、クロエは首を傾げた。

「どうということ？」

「俺達が魔剣を与えた人間が、この二年の間に次々に討ち取られているのは、知っているな」

「ええ」

「最初は、大きな力を手にして油断したのかと思ったが。そうではなく、奴らを上回る力を持った手練れがいるのかもしれない」

その言葉に、クロエは目を見開いた。

魔剣士と真っ向から戦って勝てる人間など、自分達以外にいるはずがない。そう思うが、何の確証もなしに兄がこんなことを言い出すはずもない。

「それは、誰？」

「お前は覚えているか？ 俺達が剣を与えた人間の他に、一人だけ、自力で魔剣を手にした奴がいることを」

そう言われて、クロエは二年前の出来事を思い出した。

人間社会から離れて生きている自分達にすら伝わってきた凄惨な事件。そもそも、魔剣や魔剣士という呼称自体、その事件から拝借したものだ。

「蒼の魔剣士……名前はミカゼといったかしら。その男が、他の魔剣士を倒して回っているということ？ 何のために？」

「さあな。宣戦布告のつもりなのかもしれんし、案外、俺達の下につきたくて、力をアピールしているのかもしれん。そのあたりは、本人に聞いてみればいい」

兄の物言いに、クロエは顔を上げた。

「ということは、その男はこの近くに来ているのね？」

「おそらくな。ヴァルがやられたのはつい数日前だ。それに、この辺はずっと軍の検問が張られていたからな。身動きが取れずに、この付近に逗留していても不思議はない」

兄は頷き、クロエに対してこう告げた。

「近くにいるなら、この森に興味を示すだろう。それっぽい奴が来たら、声をかけてやればいい。どうやら、向こうも俺達を探している様子だからな」

「ちなみに、その男は強いのか？」

「まさか。強い奴の相手など、お前にさせるわけがないだろう」

クロエを安心させるように、兄は優しく頭を撫でてきた。

「そこそこ腕は立つだろうがな。それでも、要は魔剣の使い手というだけだ。剣を振るうしか能のない相手に、お前が負けるわけがないさ」

光る森(3)

「ちょっと出かけてくるよ」

「また？ あんたの思い出の場所ってそんなにあるの？」

「いや、今日は軍に呼ばれたんだ」

「……………は？」

咄然とするアリアと銀行員を置いて、ミカゼは森へと足に向けた。街道沿いにいた兵士に、リチャードから預かった証明書を見せる。程なく許可が下り、迎えの車が来るからしばらく待つようにと言われた。

歩いていくつもりだったのだが、リチャードの客を歩かせるわけにはいかなと言われた。

少しして、黒塗りの軍用車がミカゼの前にやって来た。後部座席から出て来たのは、リチャードと同じ黒い軍服を着た男だった。

「お待たせしました。どうぞ」

「どうも。……どうしたんですか？ ずいぶん顔色が悪いですが」
乗り込みながら、ミカゼは隣に座る男に問いかけた。

彼の表情は青ざめ、今の今まで何か途方もない心労に苛まれていたことがうかがえた。

「ええ、ちょっと……昨夜、信じられないような出来事がありました」

「？」

首を傾げるミカゼだったが、なだらかな起伏の先に広がる森を目にして、思わずうめいた。

「あれは……」

「……」

隣の軍人は、俯いたまま動かない。

広大な森は、今や繭に乗っ取られたかのように白く染まってしま

っている。だが、ミカゼが目にしたのはその森の一部――正確には一部であつただろう場所だつた。

そこには、大規模な爆発事故でも起こつたかのような、大きな穴が空いていた。繭も木々も、そこだけは大地ごと抉り取られてしまつている。

「あれは何ですか？ あそこで一体何が――」

「分かりません。昨夜、何の気配もなく、突然あなくなっていました」
絞り出すような声で、軍人は答えた。

「あそこにも繭があつたため、同僚が夜通し作業に当たっていました。……私の友人もです」

「……それは」

何と言葉をかければいいのか分からずミカゼが沈黙していると、彼は懇願するようにミカゼの方を向いてきた。

「あなたは、あの繭を森に産み付けた犯人を追っていると聞きました。その逮捕のための協力者としてリチャード大佐に呼ばれたのだと」

「……ええ、そうです」

ミカゼが頷くと、彼は「よろしくお願いします」と深々と頭を下げてきた。

現場は蜂の巣を突いたような大騒ぎになっていた。

怒号を発しながら行き交う軍人達の合間を縫って、リチャードが待機しているという天幕へ向かう。彼は将校らしき人間と何か話しかんでいたが、ミカゼに気付いて手を挙げた。

「手はずは以上になります。少将、彼が今話した協力者です」

「うむ。……線が細いな。それなりに鍛えこんではいるようだが」
少将と呼ばれた禿頭の男は、値踏みするような視線をミカゼに向けて来た。全身を眺めているうちに、腰に下げた蒼い魔剣に目が留まる。

蒼の魔剣士だなどと、まさかそう易々と吹聴はしていないだろう

が――ミカゼが若干の不安にかられたとき、不意に少将が尋ねてきた。

「名前は？」

問われて、ミカゼはほとんど条件反射で言葉を返した。

「ルークです」

「うむ。私はダリウスだ。此度の協力に感謝する」

年季の入った敬礼をミカゼに行い、ダリウス少将は天幕を出て兵士達に指示を飛ばし始めた。

後に残されたリチャードが、ミカゼを見て笑みを浮かべた。

「ルークというのは、普段使っている偽名かい？」

「ええ。ミカゼというのは珍しい名前ですから、念のために」

「確かに、よく聞くとは言い難いかな」

そんなことを言いながらリチャードは立ち上がった。歩きながら話そう、とミカゼを促してくる。

連れ立って歩く中で、彼は問うてきた。

「車の中ではどこまで聞いたかな？」

「これといって何も。昨夜、気が付いたら森が消し飛んでいた、ということくらいです」

「そうか。……いや、実のところ、何も分かっていないからそうとしか言いようがないというのが現状だね。まったく参った」

嘆息しながらリチャードが向かっていたのは、その、気が付いたら消し飛んでいたという現場だった。

「夜が明ける前からこの付近を搜索しているが、有益なものは何一つとして出て来ない。証拠品も、遺留品も……残念ながら、生存者も」

「地面の状態は？ 爆発物なら何か痕跡があるはずでしょう」

「例えば焼け焦げたような跡か。もちろん調べた。結論からいうと、炭くず一つ発見出来ていない。つまり爆発物ではない」

「そうは言っても、これだけ大規模な現象、痕跡がないなんてありえないでしょう」

その通りだ、とりチャードは頷いた。

ちょうど現場に着いたところだった。リチャードは「少し見て回ってほしい」とミカゼに言い置き、周りの兵士達に声をかけ始めた。周囲の光景を見回しながら、確かにこれは途方に暮れるとミカゼは思った。

まさに抉り取られたという形容が正しい。森のど真ん中が、綺麗に丸く抉られていた。

足元の土にはまだ若干の湿り気が残っていた。おそらくこれらの土は、つい昨夜まで土中にあつたものなのだろう。何らかの原因で表層部が剥がされたのだ。周囲の木々をよく見てみれば、幹の半ばから削り取られたような跡がちらほら見られる。この現象の影響範囲は、おそらく円形に広がっていたのだ。

『何かが起こった』という痕跡だけは豊富にある。

だが、一番肝心な『何が起こったのか』を示すものが一つもないのだった。

——でも、これはこれで……。

「どうだい？ 何か分かったか？」

リチャードの声に、ミカゼは首を横に振った。

「これといって何も。というか、気がつく点はたくさんあるけど、その原因がまったく分からないというところですよ」

「……やはりな。我々も同じところで手詰まりだ」

リチャードは嘆息し、さりげない様子で周囲を窺った。

ミカゼも同じように周りを見る。兵士たちは作業に集中しており、こちらに意識を向けている気配はない。

「……一つ聞くんが。これと同じことを、その剣を使って君は出来るか？」

「僕には無理ですし、他の魔剣士も同じでしょう。魔剣にここまでこのことをする力はありません」

「となると、消去法ではあるが、犯人は割り出せるな」

ミカゼと同じ考えを、リチャードは口にした。

これほど大規模な破壊行為にはかなりのエネルギーを必要とする。多量の爆発物か、それに相当する未知の力。

痕跡が何もなかったことから、爆発物の線は消えた。そして未知の力を利用する魔剣士にも、ここまで大それた真似は出来ない。

となれば、残る可能性は一つ。

魔獣を産み出し、魔剣を作り――その上こんな攻撃力まで持ち合わせているなどとは、本当に考えたくないが、

「『あのお方』か。やっと尻尾を掴んだな」

「掴んだと言っているのかどうか。結局、正体は分からないままでしょう？」

『あのお方』の姿を目撃したであろう兵士達は、昨夜この場所と共に存在を消し去られている。

彼らのうち一人でも生きていたならまだしも、これでは追跡することは不可能ではないか。そう考えるミカゼだったが、リチャードは首を振った。

「そうでもない。昨日言っただろう。『あのお方』について心当たりがある」と

「あ……ということとは」

「うん。本当に偶然だが、魔獣に襲われた村に生き残りがいてね。魔獣、そして魔剣士と一緒にいた人間を目撃している」

そう言って、リチャードは懷から一枚の紙を取り出した。

「証言を元に描いた似顔絵だ。なにぶん夜のことであったし、目撃者も魔獣から身を隠したままだったから、細かい部分は想像で補ってしまっているが」

そこに描かれていたのは、黒色の衣装と長い髪、それとコントラストを描くような白い肌の少女だった。

歳はおそらくミカゼと同じくらいか。切れ長の瞳に整った顔立ち。どこまで想像が入っているのか分からないが、ずいぶん美人だった。

「感想は？」

「……想像とはだいぶ違いますね。なんていうか、戦いにくそうな相手です」

「同感だ。ま、実物がその絵の通りかどうかはわからないがね。その辺は、君が自分の目で確かめてくれ」

「……？」

何かを含んだようなその物言いに、ミカゼは訝しげに眉をひそめた。

「どういう意味です？」

「そいつは、再びここに来る可能性が高い」

リチャードは、きっぱりとそう言い切った。

「今夜かどうかはともかく、少なくとも近日中には必ず来るはずだ。駆除に当たっていた部隊だけが綺麗に消し飛ばされたことを考えるに、こいつの目的はおそらく繭を守るからだかな。勢い余って繭まで一緒に破壊してしまうあたり、細かい作業は苦手なようだ」

冗談めかした風に言うリチャードだが、何十人も人間を皆殺しにすることを、普通『細かい作業』とは言わない。

「夜の撤去作業は危険であるため、原因が解明されるまでは中止とする……という指示を、先ほどのダリウス少将に出してもらっている。つまりその間は、君は魔剣を存分に振るうことが出来るというわけだ」

「繭を片っ端から壊していけば、そのうち向こうから姿を現すというわけですね。要するに、僕の役目は囿ですか？」

「それだけではなく狩人も兼ねてもらう。つまり、君が誘い出して、君が仕留めるのだ」

「……また無茶な。軍人のくせに、民間人相手にとんでもない要求を出しますね」

「君は民間人ではなく、全国規模の指名手配犯だろう。だからこそ援護も出来ないのだよ。軍が蒼の魔剣士に助力を仰いだなどということ、表沙汰にするわけにはいかないからね。君の正体を知っているのも、今のところ私と直属の部下だけだ」

いけしやあしやあとそう言いながら、リチャードは肩を竦めた。

「無論、ただでとは言わない。成功の暁には、君にかかっている手配を取り消すよう尽力しよう。なに、全ての罪を『あのお方』になすりつけばどうにかなるさ」

「えげつない裏取引ですね。いいんですか、大量虐殺の犯人をそんな風に見逃すなんて」

「構わないよ。君が無実だということは、もうとっくに調べがついているから」

皮肉を言ったつもりだったが、リチャードは淡々とそう言葉を返してきた。

絶句するミカゼに、彼は小さく笑って言った。

「諜報部を甘く見るなよ。たかが二年前の事件、目撃者も大勢いる。ボースの町で暴れ回ったのは二人だけ。銃弾を浴びて絶命した男と、現在軍の精神病棟に隔離されている兵士だ。君は暴れていた兵士を取り押さえ、前の二人と違って魔剣の力を制御してのけた」

「……」

「君が犯人と目されているのは、その後魔剣を持ち去り行方を眩ましたためだ。身内から犯罪者を出したことに對する糾弾を嫌った上層部は、これ幸いとばかりに、三人組の犯人グループの生き残りとして、君に罪をなすりつけた。後者に関しては申し訳なく思う。弁解の余地もない組織の恥部だが、君も君だ。なぜわざわざ魔剣を持ち去った？ 犯人扱いされる可能性を考えなかったのか？」

もう二度と、この剣の力に乗っ取られる人間が出ないように。

そんな当初の意思を、ミカゼは咄嗟に口に出せなかった。

最初はそう考えていた。そして自分自身が乗っ取られることもないよう、魔剣は厚い布を固く巻きつけ、絶対に抜けないようにしてあった。

だが、旅に出てから半年後、ミカゼは魔獣の群れを率いた魔剣士に遭遇し、危うく命を落としかけた。

護身用に使っていた普通の剣はあっさり破壊され、絶体絶命の状

況で手元に残っていた武器は、蒼の魔剣一振りのみだった。

魔剣士を相手にするには、同じ超常の力を持つ魔剣を使うしかない。そう気づいた後は、運悪く彼らと行きあった場合のみ、魔剣の使用を自らに許すことにした。

そして、それから一年半。

十回に渡る魔獣との遭遇と、ヴァルを含めて四回を数える魔剣士との戦いの中で、当初の確信は、今や大きく揺らいでしまっている。蒼の魔剣には、人を洗脳する力などないのではないかと――ミカゼは最近、そんなことを思う時がある。

ボースの町で初めて柄を握ったとき、剣から多量の力が流れ込み、ミカゼの精神を奪い取ろうとした。その経験から魔剣とは危険なものだと考えていたのだが、今まで出会った魔剣士に意識を乗っ取られているような奴はいなかったし、自分も今では何の気負いもなく蒼の魔剣を振るっている。

最初のはたはただの勘違いで、あの時軍に剣を渡してしまっても、実は何の問題もなかったのではないか。

そんな考えが、頭から離れないのだった。

「……まあ、君には君なりの考えがあるのだろうか」

沈黙するミカゼに、リチャードはそう言って息を吐いた。

「過ぎたことを言っても仕方ないな。それに『あのお方』などという得体の知れない相手が出て来た現状では、魔剣の使い手である君の存在は大変心強い」

リチャードはミカゼの肩を叩いた。先の言葉が世辞でも何でもない、彼の本心なのだと、その手に込められた力が強く語っていた。

「君が頼りだ。任せていいだろうか？」

「……もちろんです。精一杯やりますよ」

そう。今考えるべきは、『あのお方』にどのように対処するかということ。

内心の不安を振り切って、ミカゼは強く頷いた。

光る森（4）

夜半過ぎ。

軍の人間はもうだいぶ前に撤収した。一人残った森の中で夜食のビスケットを齧りながら、ミカゼはふとあることを思い出した。

アリアと銀行員に、結局何も言わないまま来てしまった。

やってしまった、とミカゼは頭を抱えた。今の今まで気づかないなんてどうかしていた。出頭してくるなんて紛らわしい冗談まで口にして、今頃は「まさか本当に捕まったのか」と誤解していることだろう。

今更町まで戻るわけにはいかないし、リチャードが気を利かせてくれるのを期待するしかない。

「……さて」

腹ごしらえを済ませ、ミカゼは改めて、目の前の光景に目をやった。

森の木々に寄生しているような白い繭。淡い光が明滅し、中に息づく魔獣の胎動を伝えてきている。森の風景が、燐光に照らし出されていった。まるでおとぎ話のような、幻想的な光景だ。

仮に自分が『あのお方』の側の人間であつたなら、この光景はきっと、この上なく美しいものに見えたのだろう。

そんなことを考えながら、ミカゼは剣を抜き、無造作に地面に突き立てた。

蒼い光が大地を走り、白い繭を攻撃する。

通常の武器では傷をつけることすら困難な白い繭。だが、蒼い魔剣の力の前では、呆気ないものだった。繭は飴細工のように吹き飛び、未成熟な魔獣が、中から飛び出してきた。

体の構成がまだ不完全なのか、幼い魔獣の体は、ぐずぐずと、腐ったように崩れ落ちた。ギィィィ……と、鳥肌が立つような、おぞましい断末魔が森の中に木霊した。

聞いていてあまり気分の良いものではなかったが、少なくとも『あのお方』が来るまでは、この作業は続けなければならない。

眉をしかめながら、ミカゼは再度、剣の力を解放した。

作業を始めてから、それほど時間は経っていない。

「昨日の今日でもう現れるなんて。おかげで、長々と待つ必要がなくなっただわ」

いきなり背後から声がした。ミカゼは思わず振り返る。

いつの間にか、としか言いようがない。

リチャードから渡された似顔絵と同じ――否、それ以上の美貌を持つ少女は、それほど唐突に姿を現していた。

黒い服に、漆黒の長い髪。コントラストを描くような、雪のように白い肌。

およそ現実離れた、幽鬼のような雰囲気を感じながら、彼女は口元に淡い笑みを浮かべていた。

「何を呆けているの？ 私が誰なのか、分からないわけではないでしょう？」

「……ああ、たぶん、分かってる」

対等な言葉を返すのに、気を張ってはいなくてはならなかった。

怒気や殺気のような、直接的な威圧感はない。だが、じわじわと包むような、不気味な圧力が少女から伝わってきた。

それは、得体の知れないモノに対する恐怖心。

一目見て確信した。絶世の美女ともいうべき目の前の少女。しかしその正体は、確実に、人にあらざる怪物だ。

「それでも、一応確認させてくれ。魔剣士達が忠誠を誓っていた『あのお方』というのは、君のことで間違いないのか？」

「ええ」

最大の警戒をもって臨んでいるミカゼに対し、少女は涼やかに答えを返してきた。

「別に、名前で呼ぶことを禁じていたわけではないのだけれど。彼

らはそっちの方が呼びやすかったみたいね」

「……なら、名前を覚えてくれないか。あいにく僕には、君を敬うつもりないからね」

内心の恐怖を悟られないよう、ミカゼはあえて虚勢を張った。

だが、ミカゼの言葉に、彼女は見透かしたような笑みを浮かべた。
「そう固くならないで。安心しなさい。別に、とって食うつもりなんてないんだから」

「……っ」

敵意がないのではない。

そもそも、敵として見られていないのだ。

歯噛みするミカゼに対し、彼女はあくまで自然体のまま、言葉を続けた。

「クロエよ。呼び捨てで構わないわ」

「……それはどうも。僕はミカゼだ」

「知っているわ。蒼の魔剣士、有名人ね。その有名な剣士さんに、ひとつ、聞きたいことがあるのだけれど」

「……聞きたいこと？」

「ええ」

ひとつ頷き、クロエは問いかけてきた。

「あなたは どうして、私達の邪魔をするの？」

「……？ 邪魔？」

言葉の意味がわからず、ミカゼは首を傾げた。

クロエは頷く。心当たりがない様子のミカゼに気分を害したのか、形のいい眉を少しひそめている。

「あなた、あちこちで頑張って魔剣士を倒してくれているでしょう？ とても迷惑なの。特に目的がないのなら、今すぐやめてほしいくらいに」

「それは……」

言いかけて、やめた。

目的も何も、魔剣士が悪事を行っている以上、倒そうとするのは

当然のこと……そんな言葉に納得するような相手なら、そもそも最初から目的を問うてきたりはしないだろう。

「……。答える代わりに、君の目的も教えてくれ」

「私の目的？」

「ああ。魔剣士や魔獣を従えて、あちこちで事件を起こしている理由だよ。交換条件だ。お互い、腹を割って話そうじゃないか」

「……いいわ」

わずかに考えた後、クロエは頷いた。

「じゃあ、まずはあなたからよ。こういうのは、提案した側から言うものでしょう？」

「わかった。といっても、僕が魔剣士を倒しているのは、人が死ぬのを黙って見ていられないっていう、当たり前前の気持ちがあるからだよ。彼らの背後に黒幕……つまり君がいるらしいってことがわかった後は、そっちも探していたけどね」

「……そう。何か目的でもあるのかと思ったけど、けっこう浅い理由なのね」

人の命を助けたいという思いを、浅い理由と言い切るか。

カチンとくる気持ちを抑えて、ミカゼは告げた。

「浅い理由だと言うなら……君に何か深い事情があって、魔剣士や魔獣を従えているなら、ぜひ教えてもらいたいね」

「……そうね」

人差し指を頬に当てて、クロエは数秒思索した。

やがて、結論を出した彼女は、ミカゼに対して笑みを向けてきた。

「詳しいことは言えないけれど、”魔獣や魔剣士の”目的はひとつ。人間の数を減らすためよ」

「……そうか」

思わず見惚れてしまうほどの、美しい少女の微笑み。だからこそ、その口から発せられた言葉は、よりおぞましく聞こえてきた。

含みのある物言いからして、彼女の真意はまた別のところにあるようだが、それを聞こうとは思わなかった。

人間の数を減らす。殺すことそのものが目的である以上、どんな言葉でも彼女は止まらない。それを確かめた時点で、話すことはもう何もない。

「よくわかったよ。……君とは、絶対に、わかり合えないってことが……」

蒼い魔剣を逆手に握り、ミカゼは勢いよく、刀身を地面に突き立てた。

雷光の如き蒼い光は、大地を割りながら、一直線にクロエに向かって疾っていく。

だが、ミカゼの攻撃は、クロエの身体に触れようとした瞬間に、呆気なく四散した。

「……今の一手で、あなたに後戻りの道はなくなったわけだけれど。もちろん、覚悟の上よね？」

岩をも砕く攻撃を受けながら、クロエの様子は涼しげだった。

せめて避けるなり何なりしてくれば、まだしも希望が持てたのだが……思った以上に差があるらしい彼我の実力に、ミカゼは内心、冷や汗をかく。

「ああ。女の子を相手にするのは、いつもなら気が引けるんだけどね……今に限っては、手加減しようって気がまったく起こらない」
悪寒が走る。格の違いを感じ取ったミカゼの本能が、今すぐ逃げろと訴えてくる。

身の内から起こる恐怖心を、しかしミカゼは、無理やり捻じ伏せた。

逃げ場などどつくに失われているし、何より、自分が逃げたら、背後にある町を誰が守るというのか。

「よくわからない人ね。私に勝てないことくらい、わかっているでしょうに。それでも逃げようとしなのは、なぜ？」

ミカゼの心中を察したかのように、クロエは苦笑を浮かべながら問うてきた。

それを受け、ミカゼもまた無理やり笑みを浮かべる。

「男にはね。勝てないってわかってても、挑まなきゃいけない戦いがあるんだよ」

「そう。恰好いいのね」

皮肉でもなく、呆れるでもなく、純粋な感想のようにそう言うクロエ。

その身体の輪郭が、突然揺らいだ。

黒い靄のようなものが、彼女の身体を包んでいた。夜の闇とは明らかに違う。他の色全てを塗り潰す、濃密にして絶対の『黒』

魔剣が持つ輝きと、おそらく性質は同じだろう。だが、その強さには、何倍もの開きがありそうだった。

漆黒の力を手に纏い、クロエはそれをミカゼに向けた。

「これでお終い。さよなら、蒼の魔剣士」

その言葉が聞こえた瞬間、彼女の腕から黒い力が膨れ上がった。

「……っ！」

避けられない。瞬時にそう察したミカゼは、すぐさま剣を構え、魔剣の力を解放した。刀身から蒼い光が迸り、ミカゼの身を守るように包み込む。

咄嗟に展開した防御結界。だが、すべてを呑み込んでしまうようなクロエの力の前には、あまりにもちっぽけだった。

周囲の森が、大地が、瞬く間に闇に沈んでいく。

全ての光景が黒色に溶けた中で、それでもミカゼは、ただ一人気を張り続ける。

蒼い光を放つ魔剣が、その存在を主張し続けていた。

光る森(5)

「……遅い」

宿屋の寝室で、アリアは一人嘆息した。

日が暮れても戻ってこなかった時点で心配はしていた。だが、ミカゼは仮にも蒼の魔剣士。そうそう危険に晒されるようなことなどないだろうと、その時はまだ楽観していた。

だが、こんな時間まで帰ってこないとなると、さすがに何かあったのかと心配になってくる。

出がけの彼の言葉を思い出す。出頭してくる。まさか本気ではなかっただろうが、町の中を散策しているうちに本当に捕まってしまうたのかもしれない。

何の音沙汰もないのは、凶悪犯罪者とされているミカゼの存在を、軍が秘匿しているためではないか。

——やっぱり、様子を見てこようか。

アリアが所属するギルドというのは、言うなれば民間の軍隊だ。公的な肩書は持たないものの、請け負う仕事は国軍と重なる部分かなりあり、仲間意識やライバル意識が必然的に発生する。

もちろん、真正面からミカゼのことを問い質したところで、まともな答えなど返っては来ないだろう。仕事の領域が重なるというだけで、協力関係にあるわけではないのだから。うまく話を誘導して、それとなく情報を——

「お、おい！」

突然、アリアの部屋に銀行員が駆けこんできた。

「……っ!？」 あ、あんたね、女の子の部屋にノックもなしに——」

「はあ？ 馬鹿言うな、君みたいな子供になんか興味ない……ま、待て怒るな、それどころじゃないんだ！」

無礼なことを口走った銀行員に制裁を加えようとしたアリアだったが、そのあまりの慌てぶりが気になった。

「なに？ 火事でも起きたの？」

「違う！ とにかく外に出るんだ！ 森の方が凄いことになってる！」

森と聞いて、アリアは繭の存在を真っ先に思い浮かべた。

軍の見立てでは、孵化までの期間はおよそ一週間。それまでに撤去作業を終えるという話だったのだが、先んじて繭から魔獣が孵ってしまったのだろうか。

そう考えた直後、アリアは急いで駆け出した。魔獣が攻め込んでくるとなると、いくら何でも丸腰ではいられない。剣は手に入らないにしても、何か武器になるものを――

そう考えながら外に出て、森の方を向いて、アリアはそこで足を止めた。

「……なに、あれ」

今宵は晴天。頭上に広がるのは、雲ひとつない、満天の星空。

にも関わらず、森の上空だけは、光点ひとつ見当たらなかった。

森から立ち昇る、漆黒の領域のような『何か』が、星の光を呑み込んでしまっているのだった。まるで、空中を黒い絵の具で塗り潰したかのようだ。

とはいえ、それ自体ならば、別に驚くには値しない。

星のない夜など珍しくもない。一部分だけ星が見えないのは確かに奇妙だが、そういうこともたまにはあるだろう。月が見えなくなる時だってあるのだ。星に同じことが起こらないとなぜ言える。

自然現象ひとつで大騒ぎするな鬱陶しい――と、普段のアリアなら、そう言って銀行員を切って捨てたところだろう。

だが、なぜだろう。

慌てて部屋に飛び込んできた銀行員の気持ちだが、アリアにはよくわかる。

それはおそらく、人が持つ原初の恐怖心。

闇それ自体が恐ろしいのではなく、闇の向こうに居る、闇を纏う何者かが怖いのだ。

そう。今、あの森には『何か』が居る。魔獣など比べ物にもならない、強大な力を持った何者かが。

「せ、先生はこんな時にどこへ行ったんだ……」

追い付いてきた銀行員が、泣きごとのようにそう言った。

情けないと思う一方で、同じ気持ちだが、アリアの胸に去来する。

闇を祓うのは光、などと詩的なことを言うまでもなく、武力というのはそれだけで頼りになる。今のようない異常事態の時には尚更だ。だというのに、武力となれば人類最強クラスの剣士が、行方不明になってしまっている。

一体どこに行っているのかと、そう思わずにはいられなかった。

どれくらい時間が経っただろうか。

何もかもが消え失せた闇の中、蒼い光を障壁のように張り巡らせて、ミカゼはどうかか自我を保っていた。

クロエの姿はどこにも見えない。追撃の気配がないのは、一気に勝負を決するつもりがないからか。

——と言うより……これ以上、何かをする必要がないのか。

ミカゼの考えはおそらく正しい。現状で既に、彼女は勝利を確信しているのだろう。実際、クロエの力の前に、ミカゼは今のところ成す術がない。

そして、拮抗状態もそう長くは続きそうになかった。クロエの闇色の力は、ミカゼが張っている結界を、徐々に徐々に、舐めて溶かすような速度で浸食してきていた。

——くそ、何かないのか。

闇雲に剣を振り回しても意味がないのは、少し前に思い知った。魔剣の力はもう少し強くすることも可能だが、それは危険だと今のところは判断していた。力任せに突破を図っても、空回りするのがオチだろう。相手の手の内がまったく見えない以上、こちらだけが消耗するような事態は避けたい。

現状を打破する方法を探り、ミカゼは賢明に頭を働かせる。

だが、その一方で、内心には別の感情も混じってきていた。

これであろうやく——と、安堵と共にそんなことを思っている自分がいることを、ミカゼは自覚していた。

大抵の人間は、闇に包まれた瞬間に圧殺され、今のミカゼのような状況に陥ることはないだろう。あらゆる存在を呑み込む黒の力。なるほど大した威力だが、クロエの力の真骨頂は、むしろこの光のない空間にこそあると思う。

文字通り光明のない状況は、ミカゼの精神を大きく蝕んでいた。

二年に渡る旅路の果て。魔獣と戦い、魔剣士を屠り、最後にその黒幕に敗れる。

散り様としては相応なところではないかと、ミカゼはそんなことまで考えていた。

幸い、死んだところで悲しむ人間はいない。悲しんでほしい人は、二年前のあの日に逝ってしまった。悲しんでくれるはずの人達にも、同じ日に背を向けてきた。

クロエが何を企んでいるのかは分からないが、この場で敗れる自分がそれを気にしても仕方ないのではないか。

脳裏にリチャードの顔が浮かぶ。彼はミカゼの勝利を信じているだろう。役に立てなかったことを心中で詫びた。だが、この国を守るのは、本来軍人である彼らの役目だろう。

次に浮かんだの銀行員。人のことを師匠だの先生だの、好き勝手に呼んでくれた。そもそも魔剣を疎んじているミカゼにしてみれば、その呼称はあまり嬉しくないものだったが、人から慕われるというのは、何だかんだで悪い気はしなかった。

そして、

——…アリア。そういえば、心配してるかな。

多少がさつなところはあるが、性根は優しい少女のことを思うと、そういう場合ではないというのに、何故だか心が安らいだ。

その理由を少し考え、すぐに思い当たった。

アリアは、『あの子』に似ているのだ。誰に対しても物怖じせず、素のままに接する、怖い者知らずだった女の子。

たった数日の付き合いだが、久しぶりに人と話して笑えた気がした。

そして何より、二度と呼ばれることはないと思っていた名前で呼ばれたのは、自分でも意外なほど嬉しかった。

——…ありがとう。ごめんね——

二人に詫びると同時に、剣を握る腕から、不意に力が抜けた。

闇を前に、心が折れる。蒼い光が弱まり、闇が、ミカゼの身体を押し包む。

そのとき、

——もう終わりか？

突然、脳裏にそんな声が響いた。

一瞬戸惑うミカゼだったが、すぐにその声の主に思い当たった。以前にも聞いたことがある。

これは、蒼い魔剣の意思だ。

——……しまった。

慌てて魔剣を制御しようとするミカゼ。だが、氣力を失いかけていた今、剣から流れ込んでくる膨大な力を抑え込むことは不可能だった。

——やる気がないなら、その身体を俺に寄越せ——！！

闇を祓い、蒼い光が嵐のように吹き荒れた。

「!？」

高みの見物を決め込んでいたクロエは、思いもしなかった反撃に目を剥いた。

蒼い光が爆発するように弾け、その中心から物凄い速度で人影が飛び出してきた。ミカゼだ。木々の合間を跳ぶようにして、真っ直ぐにクロエの元へと駆けてくる。

完全に油断していたクロエは、自分でも呆れるほど容易く、懐への侵入を許してしまった。

だが、それでもまだ気持ちには余裕があった。闇色の力は既に展開させている。ミカゼが身を守るために使ったのと同じような防御結界。どんな武器であろうと、この闇を超えることなど不可能だ――と、ほんの一瞬前まで、クロエはそう考えていた。

「……っ！」

一切の躊躇いなく、ミカゼが剣を横薙ぎに振るう。

その顔に貼りついていたのは、先ほどまでの彼の様子からは想像もできない、狂気を満面に浮かべた笑みだった。

「くっ！」

ミカゼの異様な変貌を前に、クロエは咄嗟に力を強めた。

直後。クロエの首を狙った剣が襲い来る。闇色と蒼色の、ふたつの力がせめぎ合う。

崖っぷちの攻防は、闇色の力がわずかに勝った。蒼い剣ごとミカゼを弾き飛ばし、クロエは大きく息を吐いた。

――対処しなければ、やられていた……！

冷や汗を流すクロエの眼前、着地したミカゼが、ニヤリと笑みを浮かべた。先ほどまでとはまるで違う、醜悪な獣のようなおぞましさ。

――一体、彼に何が……？

すぐにでも追撃が来るかと思ったが、ミカゼはその場でゆっくりと立ち上がった。隙だらけのように見える。だが、なぜかクロエは、彼に攻撃することを躊躇った。

「……とりあえず、礼を言っておこうか」

もったいぶった調子で、ミカゼが口を開いた。

「あんたがコイツをヘコませてくれたおかげで、こうして外に出る

ことが出来た」

本当に同じ人物なのか。口調まで変わっている上に、その言葉の意味がクロエにはわからない。

「……何を」

「いや、それにしてもいい素材だ。今までの奴はすぐぶっ壊れちまったってのに、コイツはこうして喋ることまで出来る」

「……何を言っているの！」

言葉と同時に、クロエは闇の波動をミカゼに差し向けた。先ほどの攻撃とは威力が違う。どのような相手だろうと、一瞬で溶かし尽くすほどの力を込めた。

クロエの本気は、力の余波だけで大地さえ殺してしまう。繭のことを考えると使いたくはなかったが、あの男は今すぐ滅しなければ危険だと、本能が叫んでいた。

だが、

「ヌルい」

そんな軽い一言と共に、ミカゼはただの一太刀で、クロエが放った闇の波動を掻き消した。

「……っ!!!」

驚愕するクロエ。呆れたような、ミカゼの声が響く。

「あんたの力は散漫過ぎるな。雑魚を一掃するには便利そうだが、そんなんじゃない俺には通じない。もっと研ぎ澄ませないとな……こんな風によっ！」

言うや否や、彼は蒼い魔剣を横薙ぎに振るった。

その瞬間、ミカゼが虚空に描いた三日月形の剣閃が、宙を走る刃となってクロエに向けて飛んできた。

クロエは慌てて眼前に力を集中し、闇色の力の壁を造り出した。ミカゼの攻撃を正面から防ぐ。だが、剣閃が孕んだ途轍もない威力に、相殺はとも無理だと瞬時に悟った。弾き飛ばされそうなほどの力を懸命に受け流し、どうにか攻撃の方向を逸らす。

息を荒げながら顔を上げた先に、しかしミカゼはいなかった。

——…逃げた？

そう思った直後、クロエは不意に、背中に軽い衝撃を受けた。

「……？」

あまりに軽過ぎて、それがミカゼから受けた攻撃だということに最初は気づかなかった。

自分の胸から突き出した蒼い剣もまた、どこか他人事のように感じられた。

「さて。とりあえず殺してみたが……あんたは普通の生物じゃなさそうだからな。これくらいじゃ死なないか？」

身体を貫かれたことよりも、クロエは彼の物言いに恐怖を覚えた。自分が怪物であるという自覚はあった。生まれた時から圧倒的な力を持っていたクロエにとって、化物扱いなど日常茶飯事ですらあった。

ならば、そんな自分を前に『どうすればこいつは死ぬのか』などということを検討する今のミカゼは、一体何者であるというのか。

「あなたは……何なの？」

「この身体はミカゼという名だが、俺自身に名前はない。強いて言うなら『蒼の魔剣』だな」

「……ありえない。魔剣に、自我が宿るなんて」

「ありえないのは、あんたが作った魔剣に限った話だろう」

嘲笑うようにミカゼ——『蒼の魔剣』は言った。

「あんたが自分の目的のために作り出し、人間に与えて回った武器。そんなものを魔性の剣とは、俺からすれば失笑物だ。宿主を喰らい、破壊と災厄を撒き散らす唯一絶対の最強剣。それが本当の意味での魔剣であり、すなわちこの俺だ」

ズツ、という音と共に、クロエの身体から剣が引き抜かれる。

そこで初めて激痛が走り、クロエは呻きながら地面に膝をついた。背後、ミカゼが剣を振り上げる気配。とどめの一撃を察知しながらも、クロエは身動きすら出来なかった。

自分が負けるということがまず別世界の出来事のようにだし、クロ

エから情報を聞き出すようなこともせず、ただ淡々と殺しにかかる『蒼の魔剣』の徹底した容赦のなさにも言葉がない。

「……兄、さ、ん……」

最後の瞬間、クロエの口から洩れたのは、敬愛する兄への呼びかけだった。

光る森（6）

倒れ伏したクロエを見下ろしながら、ミカゼ——否、『蒼の魔剣』は静かに笑った。

身体を満たすのは、心地よい充足感。寝覚めの運動としては上々だった。彼女の能力は、敵とするには少々物足りなかったが、趣向としては悪くなかった。おかげで、良い感じに気分が乗っている。

さあ、本当の楽しみはこれからだ。

まずは軍。その後、麓の町を順番に襲撃する。今までの身体は一時間もしないうちに動かなくなってしまう、興ざめも甚だしかったのだが、この身体にそんな気配はまったくくない。

何しろ、一時は自分——蒼の魔剣の力を制御し、抑え込んだ人間である。その潜在能力を解放した時、一体どれほどの力を発揮するのか。

想像するだけで身体が震えた。身の内から沸き起る興奮を楽しみながら、蒼の魔剣は軍の野営地に足を向ける。

だがその時、妙な違和感を覚え、蒼の魔剣は足を止めた。

歩き出そうとした時、何かに引っかかったような、ほんのわずかな抵抗感があった。

「……？」

普通ならば、気にするほどのことではない。だが、その力によって多くの宿主を破壊してきた蒼の魔剣にとって、肉体の不調は見逃せるものではなかった。

その場で軽く手足を動かしてみる。剣を振るってみる。特に気にならないところはない。

それなのに、いざ目的地へ行こうとすると、どうしても身体が重くなる。

一体これは何なのか。疑問に思い、背後を振り向いた瞬間、蒼の魔剣はようやく察した。

自分は——否、この身体は、クロエの亡骸から目を逸らせずにいるのだ。

身体の内側から湧き起こる激情。なぜこんな結果になってしまったのかという怒り。これは蒼の魔剣のものではない。この身体の持ち主——ミカゼのものだ。

「……こ、の……」

精神の奥底。暗い檻に閉じ込めて、二度と出て来れないようにしたはずのミカゼの意識。

彼が今、檻を突き破らんばかりの強さで、蒼の魔剣に抵抗している。

「……舐めた野郎だ……肝心なとこだけ俺にやらせて、事が終わったらさようならってか……!!」

心の内側、猛烈な速度で意識の手綱を奪いつつある主人格に、蒼の魔剣は声に出して罵声を浴びせる。

返答は、脳裏から返ってきた。

——出て来いなんて言った覚えはない。

「……よく言うぜ。俺が出て来なきゃ、お前は負けてたんだぞ」

——お前を解放するくらいなら——

「——負けて、死んだ方がマシだ」

最後の方は、自ら声に出して喋っていた。

感覚が蘇る。気がつけば、ミカゼはその場に膝をついていた。とにかく消耗が激しく、しばらくは立てそうになかった。

重い身体を引きずるようにして、手近にあった樹に寄り掛かる。

一息ついた後、クロエの方に目を向けた。

仕方のないことだとは、思う。

彼女は決して善人というわけではなかった。魔獣を産み出し、魔剣士達を従え、罪もない村や町をいくつも滅ぼした。どんな事情があれ、その罪は重い。

蒼の魔剣の意思などなくとも、こういう結果になるのは、必然だ

ったのかもしれない。

だが、それでも、この眺めはミカゼには堪える。

背後から剣で斬りつけられ、倒れ伏す少女という構図。その姿は、否応なしにあの日のことを思い出させる。

抜き放ったままだった魔剣を鞘に納め、離れた場所に放り投げた。平静であれば意識を吞まれることはないと分かっている、今はあの剣を手元に置いておきたくなかった。

クロエから目を逸らし、膝を抱えてうずくまる。戦いが止んだことは、どこかしらからリチャードにも伝わっているだろう。くたくたに疲れていた。彼が来るまでに、少しでも休息をとっておきたい。眠ろうとしているのに、悪い考えが脳裏を回り、とても眠れそうになかった。

蒼の魔剣にはもう、他人を乗っ取る意思などないのではないのか。今、リチャードに剣を預けてしまえば、すべて終わるのではないか。

そんな甘い考えは、先の出来事で完全に潰えてしまった。

如何なる衝撃にも傷一つ負わず、鍛冶屋の炉の中に放り込んでもビクともせず、人ならぬ怪物であるクロエとの戦いにすら打ち勝ってしまった魔剣。

そんなものと、自分はあとどれくらい付き合っていけばいいのだろう。

翌朝。

「先生っ！ 一体どこへ行っていたんですか、大変だったんですよ。こっちは！！ 何しろ空が」

「うるさいっての」

ミカゼに縋ろうとする銀行員を蹴とばして、アリアは改めて、戻ってきたミカゼを真正面から見据えた。

軍の中に二年前の事件を知っている人間がいて、そのことについ

で一晩中話してきた。つい徹夜してしまったのですごく眠いと、彼はそんな風に事情を説明した。

はつきり言って、怪しい。常の余裕はどこへやら、顔面蒼白、今ならアリアの一撃でも倒せてしまいたいようなほどの消耗具合。何か大事件に巻き込まれたことは、想像に難くない。

問い質したい気持ちは強い。いくら事情を知っている人間がいたとはいえ、指名手配犯であるはずの彼が、何の制限も受けずに戻ってきたことも不可解だ。一体何があったのかと聞きたい。すごく聞きたい。

だが、ミカゼの表情が、すべての質問を拒んでいた。

聞いてほしくない、何も言わずに納得してほしい。そんな気配を、アリアは何となく悟った。

——…こんなに弱い顔するんだ、コイツ。

小さくため息をつき、それでアリアは心に決着をつけた。

「出発は明日ね。眠いんでしょ？ 説明はもういいから、部屋に行って寝てきなさいよ」

「いや、少し休憩すれば大丈夫だよ。急いでるんだし」

「わたしにも負けそうなくせに、強がってんじゃないわよ。遅刻の許可はとってあるんだし、出発の手続きに手間取ったって言えば大丈夫よ。……ね？」

顔を向けると、銀行員は一瞬「え!？」という表情を浮かべたものの、小さく頷いた。

「あ、ああ……仕方ない、先生のためなら……何とかします……」
いや、無理しなくても大丈夫ですよ——と、おそらくそんなことを言いかけたミカゼだったが、

「いーから、あんたはさっさと休む!! それにね、護衛役がそんなにふらふらしてたんじゃ、こっちだって不安なのよ」

アリアはミカゼの言葉を遮り、彼を強引に部屋の方へと押しやった。

「あんまりぐだぐだ言っていると、蹴るわよ」

「わかった、わかったよ……ありがとう。それじゃ、ちょっとだけ休ませてもらうね」

苦笑を浮かべて、ミカゼは頷いた。おぼつかない足取りで、彼は部屋の方へ向かっていく。

その背中に目を向けながら、アリアはもう一度だけ嘆息した。

今はまだやることがあるから。そう言って、ミカゼは一度町へ戻って行った。

ギルド員である少女と銀行員を、目的地まで送り届けること。その程度の仕事ならこちらでやっておこうと言ったのだが、彼は譲らなかった。

クロエというらしい少女との戦いの中で、何か精神的に堪えるものがあつたのだろう。そう思い、リチャードは深くは聞かなかった。

「……大佐？」

部下の声に、リチャードは我に返った。なんでもない、と首を振る。

西方司令部の地下室。表向きは存在しないことになっているこの部屋は、普段は国家転覆を計ったテロリストなどといった、重要犯罪者に対する尋問などに使われている。

『彼女』を迎え入れるにあたり、リチャードは必要と思われる準備を大急ぎで整えた。寝台には手足を繋ぐ手錠。更に、全身を拘束する鋼鉄製の鎖。衣服はすべて剥ぎ、肉体の如何なる変化も見逃さない構えである。

ここまでやってなお、万全とはいえない。

政治犯から殺人鬼まで、数多くの犯罪者を相手にしてきたリチャードではあるが、人外の怪物と相對するのは、さすがにこれが初めてだからだ。

「……しかし、ここまでやる必要があるんかね」

彼女——クロエの遺体に対する扱いに、軍医は難色を示した。西

方司令部に常在している彼は、医者としての経歴は確かなベテランである。

命を落とした者に敵も味方もない。そんな信条を持つ彼にとって、死者に鞭打つような真似をしているこの状況は、おいそれと容認できるものではないのだろう。

「協力者の話では、化物じみた力を持つ超越者だそうですから。まさか蘇生まではしないと思いますが、念を入れておくに越したことはありません」

「……うちの娘がちょうどこれくらいの歳なんだがねえ」

嘆息しながら、軍医は検死を開始する。

その様子を見守りながら、リチャードは今後の展開に思いを馳せた。

本音を言えば、生け捕りが理想ではあった。だが、たとえ死んでしまっても、彼女の使い道は十分にあった。黒幕を捕らえたという事実は、魔剣士達への大きな牽制になる。ボースの事件の罪を着せ、ミカゼの冤罪を晴らすことで、彼を自由の身にすることも出来る。

そして何より、その身に宿るという超常の力。

ミカゼの話によると、一時は蒼い魔剣の力すら凌駕していたという。その正体は、是が非でも掴みたいところだった。

「確かに死んでる。間違いねえ。ま、腹にどでけえ風穴開けて、その上背中からも斬られてんだ。これで生きてるなんざありえねえよ」
「それがありえるかもしれないから、わざわざあなたを呼んだんですよ」

「ふん。……で？ どうすんだ？ 解剖もするってんなら、それなりの準備が要るぞ」

「いえ。それは後回しです。身体が残っているうちに、色々と役に立ってもらわなければなりません」

リチャードの言葉に、軍医は不満げに鼻を鳴らした。

「如才のないこつて。んじゃ、とりあえずは保存しておくってこと

でいいんだな」

「ええ。傷をつけるのは後からでも出来ますからね。高価な美術品を扱うように、丁寧にお願いしますよ」

リチャードの言葉に、軍医ははつきりと敵意を露わにした。

「……上官にこんなこと言いたかないけどよ。あんま外道なことばっかやってると、そのうち天罰が下るぜ」

凶悪な犯罪者の遺体が見せしめ等に使われるのは、決して珍しいことではない。だが、今回の場合、相手は年端もいかない少女なのである。少なくとも、外見は。

同情するのも無理はない。同じ年頃の娘がいるというなら、尚更だろう。そう思いながら、リチャードは彼の肩を叩いた。

「今のは聞かなかったことにしますよ。……天罰だと言うのなら、彼女のこの境遇こそが天罰です。彼女は多くの人の命を奪った。同情もけっこうですが、その事実だけはお忘れのないように」

「……はいよ」

軍医は、渋い顔をしながらも頷いた。

彼に背を向けて、リチャードは地下室を後にした。

自室に戻る途中、リチャードは部下に声をかけた。

「ミカゼ君の指名手配を、先に解いておいてくれ。ないとは思いますが、捕まったりすると面倒だからな。全ての罪はあの少女に押しつける。根回しは任せる」

「了解しました。そういえば、今、彼はどこに？」

「三日後にポートサイドに着く予定だそうだ。そこに迎えを出す。手配を解いた後、ほとぼりが冷めるまでは、適当な場所に匿って――」

ミカゼの今後の扱いを口にしながら、リチャードはふと、窓の外を見た。

「……？ あれは誰だ？」

正門から入ってすぐの広場。そこに、一人の男が佇んでいた。背

は高い。体格もいい。燃え盛る炎のような金色の髪に、血で染めたような紅い衣服。

リチャードの言葉に部下もまた窓の外に目をやり、そして首を傾げた。

「何者でしょう。服装からして一般人のようですが、敷地内に入ってくるなんて……見張りは何をやってたんだ？」

まったく同じことをリチャードも思った。一般人に軍の施設への立ち入り許可が降りることなど、そうそうありえない。仮にあったとしても、案内係という名の監視役がついているのが普通だ。

だが、男の他に、広場に人の姿などない。

彼は何かを探しているような様子で、ゆっくりと辺りを睥睨していた。そんな彼が、ふと、リチャードの方に目を向けて来た。

目が合った——そう感じた直後、

「俺の妹をどこへやった？」

背後から聞こえた高圧的な声に、リチャードは驚愕した。

慌てて振り向いた先、ほんの一瞬前まで広場に居たはずの男が、怒りに燃えた瞳をリチャードに向けてきていた。

少し遅れて、窓が割れる音が響いた。背後からガラスの破片がふりかかる。だが、リチャードはそれを避ける気にもなれなかった。

今、何が起こった？

まったく見えなかった。それどころか、その動きを感じ取ることすら出来なかった。高速で動いたというようなレベルではない。『あそこ』から『ここ』へと、空間を渡るような瞬間移動。

男は怒りを押し殺しているような声で、もう一度問いを放ってきた。

「門のところにいた奴らは知らなかった。俺の妹がどこにいるのか、お前達は知っているか？」

妹というのが誰を指すのか、もはや考えるまでもなかった。

化物じみた力を持った超越者——蒼の魔剣士をしてそう言わしめたクロエ。その兄の力が、妹以下などとは思わない方がいいだろう。どれほど樂觀視したとしても、クロエと同等。そしておそらくは、それ以上。

それら一連の思考を、リチャードは決して顔には出さなかった。だが、

「……何か知っているな？」

ただの一瞬でリチャードの思考を看破した男は、その身体から猛烈な怒気を膨れ上がらせた。

「答えろっ！！ 妹をどこへやった！！」

力の余波とも言うべきものが廊下を伝い、窓ガラスが次々と、音を立てて割れていく。天井や床、壁に無数の亀裂が走る。

「……こ、これは……っ！？」

なるほど確かに、人ではない。

この期に及んでそんなことを考えているのは、根っからの軍人気質なのか、あるいはそう考えることで、平静を保とうとしているのか。

「大佐！ お逃げください！」

その声にハッと目を向けると、部下が懷から拳銃を取り出すところだった。

「いけない、それは——」

やめろ、と言う時間すらなかった。

拳銃を構えるよりもずっと早く、彼の身体はボールか何かのように軽々と吹き飛ばされてしまったからだ。

物凄い音を立てて天井や壁に激突し、それでも勢いは止まらず、廊下の曲がり角に激突して彼はようやく止まった。もはや、ピクリとも動かない。

「……ああんりたくなければ」

男が何をしたのか、リチャードにはまるで見えなかった。

ただ、それが自分には絶対に避けられない攻撃であることは、心

の底から理解できた。

「妹のところまで、俺を案内しろ」

ついさっき後にしてきたばかりの地下室を、リチャードは再び訪れていた。

軍医が何事かと目を見張っている。そんな彼に、男を刺激しないように、目配せで伝えた。

騒ぎは既に司令部全体に伝わっているだろう。もう間もなくここにも人が駆けつけるだろうが、彼らの力はあまり当てには出来ない。それよりも、今呼ぶべきはミカゼだ。今頃は、部下の誰かが彼を呼びに行っているはずだった。クロエの絡みで何かあった時のための保険のひとつ。彼が来てくれれば、何とか勝機が見いだせる。

それまで、何としても、この男をこの場に留めておかなければならない。

「……もう間もなく、大勢の兵士がここにやってくるだろう」

意を決し、リチャードは男に声をかけた。

「君の力をもってすれば脱出することなど造作もないだろうが、この場は私に任せてくれないだろうか？ 無用な犠牲を出したくないんだ。手出しをしないように、話をつけるから」

鎖や枷を素手で引きちぎり、クロエの亡骸を優しく抱いたまま、

男は言葉ひとつ発しない。

そうこうしているうちに、大勢の人間の足音が聞こえてきた。リチャードが内心で焦りを感じ、もう一度声をかけようとしたところで、男は不意にこう言ってきた。

「妹が身につけていたものはどうした？」

「そ、その箱の中に入っている。服も一緒だ」

後で鑑識に回そうとしていたものだ。男はそれを片手で掴み上げ、もう片方の腕でクロエの身体をしっかりと抱きかかえ、ふいに頭上を向いた。

そこには、石造りの天井があるばかりである。

自分達と同じような力を持ちながら、英雄として人々に受け入れられた人間の話。

それは、いつの世にもありふれた、魔王を打ち倒す勇者の英雄譚。二人は考えた。自分達が受け入れられないのは、自分達以上の力を持つ存在がいなかったからで。

自分達よりも凶暴で、人間に対して残酷な奴がいれば。そいつを倒して、自分達が人間の味方だと知らしめることが出来れば。

世界を襲う魔王さえいれば、あの物語を現実のものに出来るのではないか、と。

「……クロエ……クロエ……すまない、すまない」

勇者と魔王を同時に演じる。計画は順調に進んでいた。邪魔立てなどあるはずもなかった。魔剣士達は自分達に心酔しているし、自分達とまともに戦える人間など、いるはずがないと思っていた。

その慢心が、その油断が、この悲劇を招いてしまった。

「クロエ、すまない……許してくれ」

妹を殺した人間。

軍人達であるはずがない。クロエは接触し、そして敗れたのだ。

あの男――蒼の魔剣士に。

「許してくれ……俺はもう、耐えられん」

怒りと悔恨が入り混じった独白。それと同時に、ハザードの周囲で光が渦巻き始めていた。

無数に出現する光の渦は、ハザードの力の顕現である。妹の力を闇とするならば、彼の力は光なのだ。

狙いは眼下。妹が捕らわれていた軍の施設。

妹の亡骸を救い出した以上、あんな場所にもはや用はない。

「お前を殺した世界が在ることに、耐えられん」

そんな言葉と共に、ハザードは力を解放した。

渦巻いていた光は無数の光線となって、軍の施設に降り注ぐ。

一瞬遅れて、眼下で山が抉れるほどの大爆発が起きた。雷撃にも等しい威力を孕む光線の集中砲火は、施設はもちろん、その周辺の

森や平原も、跡形もなく消し飛ばしていた。

その破壊の規模は、魔剣士や魔獣の被害などとは、比べ物にならない。

「全て壊す。何もかも、跡形もなく消し飛ばす。許してくれ、クロエ……お前が積み上げてきたものを、俺は完膚なきまでに破壊する」
大破壊による轟音も、ハザードのいる位置からはどこか遠い世界のように聞こえる。

「英雄になぞ、もはや何の興味もない。俺はもう——魔王でいい」
雲の上。冷たい風が、ただひたすらに吹き荒れる。

絶対強者（1）

潮騒の音が響く。抜けるような青空の中を、海鳥達がのんびりと泳いでいる。

ここ、港町ポートサイドで、この奇妙な道連れの旅はひとまず終わりを迎える。

「それでは先生！ 本当に、本当にありがとうございました！」

周囲を憚らない銀行員の大声が、大通に木霊した。

「先生がいなければ、今頃どうなっていたことか……！！ このご恩は一生忘れません！！」

ミカゼの両手を握ってぶぶんんと振るう。感極まって、目に涙まで浮かべている。周囲から何事かという視線が向けられてきている。正直、居たたまれない。

とはいえ、一応は自分を慕ってくれている人間の手を振り払うことなど、ミカゼにはとても出来ない。

なので代わりに、傍らにいるアリアに目を向けた。

呆れ顔を浮かべていた彼女は、ミカゼの視線に気づき、ため息をひとつ。ミカゼと銀行員の間に割って入る。

「それくらいにしときなさいよ。周りが注目してるでしょうが」

「む……」

不満げにしながらも、叫びまくったことで多少は落ち着いたのか、銀行員はミカゼの手を離した。

次いで彼は、アリアの方に目を向けた。

「あー、その、なんだ。君にも世話になったね」

「……結局最後までそういう態度なのね、あんた」

露骨な態度の差には、もはや怒る気にもなれないようだ。アリアは面倒くさそうに手を振り、踵を返した。

「行くわよ、ミカゼ。そいつにお説教したい人達が、銀行の方にはたっくさん居るでしょうから。あんまり引き留めてちゃ気の毒なものよ」

アリアの捨て台詞に、銀行員は喉が詰まったような声を漏らした。ミカゼは小さく息を吐く。最後くらい仲良くすればいいのに、と思う。当初こそ確執があった二人だったが、その後の道中で、喧嘩友達のような間柄は築いていたようなのだが。

「ほら、ミカゼ」

「わかったよ。それじゃあ、お元気で」

「はい。先生も、お達者で」

銀行員に一礼して、ミカゼは彼女の後を追う。

その背後から、更に銀行員の声がかかった。

「――君も、また何かあったら、よろしく頼むよ」

アリアの足がピタリと止まった。

振り向きはしない。心中ではおそらく『よくもまーいけしやあしやあとコイツは』などと思っていることだろう。

だが、ここまで清々しく言われたのでは逆に腹も立たないらしい。アリアは嘆息を一つした後、片手を挙げてひらひらと手を振った。

「今度はちゃんと、最後まで雇ってよね」

「善処しよう」

善処だけかよ、とツツコンだ彼女の声は、それでもどこか楽しげだった。

「あ~~~~、終わったー!!」

海原を望む公園のベンチに飛び乗り、アリアは盛大に声を上げた。「お疲れ様」

ミカゼはその隣に腰を下ろす。手には昼食用に買ったサンドイッチの袋。最後だからと、アリアが奢ってくれたものだ。

銀行員が個人的に謝礼を出してくれたので、ミカゼにもサンドイッチを買う金くらいはあったのだが、そのお金で一日でも多く屋根

のある場所で寝なさいと言われてしまった。

「こんなに色々あった仕事は初めてよ。あー疲れた疲れた。さ、お昼食べましょ」

紙袋をがさがさと探り、取り出したサンドイッチに大口を開けてかぶりつく。『羽を伸ばす』という表現がぴったりの仕草を笑いながら、ミカゼは自分のサンドイッチを取り出して齧りついた。

そのまましばし無言で食事を続け、ミカゼが半分ほど食べ終えた時、不意にアリアが問うてきた。

「で、何があったの？」

不意打ちのような言葉。訳が分からず、ミカゼはオウム返しに問い返した。

「何がって、何のこと？」

「とぼけないでよ。一昨日の新聞を見てから、あなたずっと落ち込んでるじゃない」

一昨日――正確には、その前日の夜に起きた事件。
軍の施設が一夜にして壊滅。建造物の跡すら残さない規模の大破壊現象。

生存者は当然のようにゼロ。遺体がまともに残っている者すら、ほとんどいないという。

あの場所には、リチャードもいたはずだった。

「……バレたか。鋭いね」

「バレバレよ。何があったの？」

「ちよっとね。知り合いが亡くなったって書いてあったから」

「……？」

ミカゼの言葉に、アリアは不思議そうに首を傾げた。

「知り合い？ でも、あなたって……」

「そりゃ指名手配中の身ではあるけど、僕にだって知り合くらいいるよ」

「そりゃそうだろうけど……そ、そう。お気の毒ね」

よくわからないという表情を浮かべながらも、ひとまずは人の訃

報に対し、アリアは律儀にそう言うのだった。

曖昧にも程があるような説明だったので、よくわからないのは当たり前前だ。だが、詳しい説明をする気はミカゼにはなかった。すべてを明かそうとすれば、それはリチャードやクロエの存在まで説明する必要がある。そうなれば否応なく、彼女はこの事件に巻き込まれてしまう。

「気にすることないよ。知り合いって言っても、ちょっと会っただけの相手だから」

心中の思いをおくびにも出さず、ミカゼはそう言ってアリアを励ました。

「ん……っていうか、なんであなたが私を励ましてるのよ。逆じゃない」

「どっちでもいいんじゃない？」

軽口を叩きながらも、ミカゼは心の隅で、静かに『この後』のことを考えていた。

施設を破壊した奴のことが気になる。まずはそいつの正体を突き止めなければならない。その後は、クロエが残っていた魔剣士達を倒していく。どちらにしても一人旅だ。危険な道中になる。他人を付き合わせるわけにはいかない。

人里に寄らず、獣のように野山に行く。そうすれば、いつ襲われても、周りを巻き込むことはない。

それが最善だと、そう思う一方で、どこか名残惜しく感じている自分がいることをミカゼは感じていた。

二年ぶりに人と打ち解けて、共に過ごした日々。楽しくなかったといえば嘘になる。出来るならこのままもう少し——そう思う気持ちには決して弱くない。

だが、その思いに甘えてしまったら、きっと自分は、二度と立ち上がれなくなる。

「……」

この昼食で最後。食べ終えたら、アリアにも別れを告げる——そ

う考えていた矢先、再びアリアが問うてきた。

「聞いていい？」

「ん？」

「ミカゼはどうして、その魔剣を持ってるの？」

言葉の意味が分からなかった。

アリアは口を開きかけ、数秒逡巡していた。自分がそれを問うていいのかと悩んでいたのかもしれない。

「だって、あなたは二年前の事件の犯人じゃないんでしょ？」

「……どうしてそう思うの？」

「だって……うまく説明できないけど、でも、ミカゼが何十人も何百人も、人を殺すなんて思えないし」

——いや、残念だけど、それは違うよ。

そんな言葉は瞬時に脳裏に浮かんた。自分が犯人なのは間違いな
いと言わべきだと思った。

だというのに、その言葉を口にするのを、どうしてかミカゼは躊躇った。

凶悪犯扱いされるのには慣れている。面と向かってではないにせよ、『蒼の魔剣士』や『ミカゼ』に対する誹謗中傷はこの二年の間に何度も聞いた。心を抉られるような言葉を受けて、様々な思いが溢れそうになって、それでも全てこらえてきた。

そういう扱いをされることを承知で剣を持ち去ったのだから、何も言えない、何を言う資格もない——そう覚悟していたはずだった。世の中全員が敵に回ったというわけでもない。今もあの町にいるであろう家族は真実を分かってくれているし、一時ながらリチャードという理解者もいた。それで十分だと思っていた。
だが。

自分の人となりを見た上で、無実と信じてくれた人間というのが、こんなにも嬉しいものだとは。

「ねえ？」

「いや、その……」

あ、やばい。

どうしよう。ちょっと泣きそうだ。

だが、あと五分もしないうちに彼女と別れようというのだ。余計なことを口走って話をややこしくさせても仕方ない。

この少女は、自分が無実だと分かれれば、世間体も何も気にせずにあれこれ世話を焼いてきそうだ。

「僕は――」

口を開きかけたところで、ミカゼはふと、眼の端に映る奇妙なものに気付いた。

二人がいる公園は、海を望む崖の上、海上にせり出すような位置にある。柵の向こうはもう海で、人が立っていられるような場所はない。

だというのに――あの男はどうして、そこに平然と立っているのか。

「……え？」

ミカゼの様子を目にしたアリアがそちらを向き、同じように目を丸くした。

そして、彼女のその反応とほぼ同時に、海の上の男がミカゼに殺気立った目を向けてきた。

「人の妹を手にかけておきながら、女連れとは優雅なことだな。蒼の魔剣士」

「っ!!」

その一言で、ミカゼは男の正体と目的を察した。

「――逃げろっ!」

「きゃっ!？」

アリアを突き飛ばし、ミカゼは蒼い魔剣を抜き放った。解き放たれた力が、蒼い光となって迸る。

公園に集まっていた人々が、何事かとこちらに目を向けた。ミカゼは彼らに対して――ほんの一瞬躊躇した後、声を張り上げてこう怒鳴った。

「俺は蒼の魔剣士だっ！　今からこの町にいる人間を全員殺すっ！　まずは、お前らだっ！」

言葉と同時に、魔剣を勢いよく振り降ろした。轟音と共に大地が砕け、嵐のような風が吹き荒れた。

「……う、うわ、うわあああああああああああああああ！
！」

目の前で何が起こったのか。それを理解した周囲の人間は、我先にと公園から逃げ出していく。

唯一自分の方へ駆け寄ろうとしたアリアは、周りの男達に取り押さえられて連れていかれた。彼らの腕の中をじたばたと暴れながら、彼女は最後まで叫んでいた。

「ミカゼ！　ミー——ちよつと、離してよっ！」
「……」

あえて彼女に振り向きはせず、ミカゼは男の方を向く。

ミカゼが引き起こした騒ぎを冷淡に眺めていた彼は、やがて呆れたようにこう呟いた。

「無駄なことだ。どうせ奴らは全員死ぬ」

「……どういう意味だ？」

「俺が殺す。一人残さず、徹底的に、何もかも全て。世界にほとんど嫌気が差した。いっそ何もかもなくしてしまった方が清々しい」

「……なぜだ？　なぜそんなこと——」

ミカゼの問いに、男が視線を向けてきた。

「……っ！」

声に出さずとも、男の底知れない怒りが伝わってきた。視線だけで圧され、言葉を失うミカゼに、男は静かに告げた。

「すべては貴様のせいだ」

「なに？」

「貴様がクロエを殺したのだろうが。俺の妹を……この世でたった一人の家族を。半身を奪われたようなこの痛み、同胞を何百人も手にかけてという貴様には、決して分かるまいな」

「……」

男の言葉を、ミカゼは無言で受け入れた。

仕方ない、と自分を納得させる。男が自分を憎むのは正しい。どんな事情があれ、ミカゼがクロエの仇であることに違いはないのだから。

「……僕を憎んでいるのは、分かった」

逃げるわけにはいかない。

男の存在は自分が招いたようなもの。ならば、ここで絶対に止めなければならぬ。

「でも、この町の人にまで手を出させるわけにはいかない。どうしてもというなら、先に僕を倒して行け」

対する男は鼻を鳴らし、首を巡らせて周囲を睥睨した。先ほどミカゼが起こした騒ぎのおかげで、もはや人の姿はない。もう少しすれば『蒼の魔剣士』を捕らえるために人がやってくるだろうが、

「お前は、この町を守りたいのか？」

男の問いに、ミカゼは頷く。

「ああ」

「そうか。俺も、妹を守りたかった」

「……」

淡々と。

抑揚のない声で、男は言葉を紡ぐ。

「だが守れなかった。俺はお前の魔手から妹を守れなかった。お前はどうか、蒼の魔剣士。お前は俺から、この町を守り切れるか？」

途端、男の身体から強烈な光が迸った。

あまりの光量に目が眩みそうになる。ミカゼは目を細め、どうか男の姿を目に映していた。

クロエの力を闇とするなら、兄である彼は、どうやら光の力を使えないらしい。

「試してやる」

静かなる宣言の後、

光を纏ったもう一人の超越者は、物凄い速さでミカゼの懷に飛び込んできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3892v/>

蒼の魔剣士

2011年10月30日03時12分発行